諸家句集

特別
へ5
3374
4 止

歌仙

梅翁長
嵐山書

へ刋5
3374
4

いつもやゝ入る門柳　丞年
涼風起る水のはしロ　素升
勝しく酒も肴と持よりて　正来
鮮の小盤をめくるこゝろ　年
庭にかけぬけて晴る月の雨　朴
来てゐる中へ来て下さ隠　永
此情常ありて松も知らぬと　年
心のきまる子の縁母子　朴
二口て云えてつる独の世話　来
人とる礼路礼見てあまめく　寧

[library seals]

手まくらに寝て明る別哉　林

あらためぬ音の中にし　来

棹さして追て捕れ月の影　年

沈りぬる虫の声のうき　林

陣のうちにしてきたんなり　来

天の川はこへりたる　天保十之雑方

六月のまれなれはこそ鶴もしら中にはえ

あれし沁しあらし月のよろしき　永年

此ごろは長き遣人暮れ暮れは呉北

あつくてみやこぬ

再出居士追福之一順

涼しさに北をもいはゆる雲の秋　再出居士

鶴る音に袖ぬらし月　玉年

二ツ橋にかゝる声の先そ　二京

黄葉に追良の姿も鶴市　魚堂

拵ふてあそふるさまも以下岸　永年

河原に上るに立さいさうし　佐夫

裾もりに利鏡の姿の近あき　柳居

奈良にハ古き神社仏閣、裏河

御所さま風の如く葉あり　松翁

まつのしし[redacted]う松さふ姝　下総　李々

り継れ小ぐさけり汁仕立を　相模　象岳

七松松え川岸のせはしさ　千住　寿玉

宮うし月見の真の寄床とひ　吉原　五休

芙蓉てせんするも新をは　千住　梅紅

隣りて庵てこのそら節をそ　江戸　知奈

火をそ折波す白ふ無隠そう　日光　夏子

雅樽子森うくこそれ花をむ　寿閑

白隠の中り房良冬し　常州　壱哉

此おしく何子来のそれかり　相模　儀静

空の照り冷以风まう　新宿　扇舟

紳深れ半城首り是然ち汁　常州　松三

在家の婚そ携もされ給ぬ、　尚声

進り本子居をつたあしお梅　千住　寿那

皇し通りの霜雪り降、　奈良　梅貞

屋珠子敬ハ送りし谷ゐのう　信濃　象岳

筏り案の阿の今りもし何り、　法海

伯父さまへ椒つくる庭れ年まの　千住　廿方一運

茶の香のこゝやまかりて和みける　西海

何年志を折て野の伏れけり　魯重

入相に菊咲まて稲荷して　二京

淵の影かけ夜松の声とく　柳所

眺の花すゑて姥しらぬ月の猿　玉年

簾の糸をこれさへ露の玉より　青宜

混果何も松の露そ迷ふ子　安海

折ことのいつも年ふれて塚　杜夫

蹴られて茸を志の袖鏡見　山風

柳の鮫ふくりひろかくつ　書

翔晴り。萬高う立かたくて　閑

松の露もひし俵僕の景気　京

人抜けもなと気いのまれ哉　青松

隣ある名を伽ましく湖る　宣

草も粉は住まゝ足を伸はらん　央

慕ともまくかゝる花の気し　海

こゑれと云ふ是する箱の月　朱

稲葉の脂れ無かに在をし　簡

まくらに見ゆる砧守れ　逸桁

除夜遠く隔く花く添ふし　桁

二氣みのうし顔の手を筌ふよふ逆え　海

雪ちりくと影すの吹く風　圓

松原の郎へ太鼓響くし　後玉

明き原くて過ぐるさま哉　隣

たい以来く嬲くやうなを打ちふく　簡

恨以ふくる人廓かし　桁

青笠　二
丹馬　四
山圓　二
桃柳　四
青桁　三
玉永　三
二京　三
後玉　二
逸桁　三
桃央　三
黄重　三
魚無　一
朱雀　一

諷まて枯魚の場らくよし　朱

満夜を出して風呂を解込　京

露懸れ来る月は中きぬ迄　玉

秋の花も馬の野さく捨もる　桁

秋の市腑は街れ静なり　央

小つり見猶子秋の月つく　重

酒の肴なまるなし氣の若き　魚無

よろめく中くる得く我鍬　朱雀

京月庵老人の追善に
なくひ得るとこ[illegible]
霜の後これも香さし樓葬　百海
咲きたる杉に招く福[illegible]　州が 一湯
物知ぬ時代咄しに萩の宿　、西芝
一吹風の後は静なり　、菜芝
水色の月を掬るや柳　蒲生 宗般
秋の粉揮の粉う捌ける　宍戸 幻宗
竹ゆう眠の[illegible]の気色　、梅径
結も結も何る人寐　常山 東条

琴弾の宿に困る催促や　古河 未雪
この人は気首の紫尽を[illegible]　乙女川岸 更水
梅の水の屑さまの白の汁しさに　小山 如径
春色の鋭さ戸さ眠る[illegible]　、前大
探花へ也れは黄丹て白む月　生路 蓮阿
川蝉の別逆はおもひやる哉き　水代 如宴
子配し御座気りれむ座り　、子玉
これいと斗寿の大寒　、崇郁
姐佐も都こされ花さこの月　栢木 如佛
錢を貰って来る長松　、柳酒

箒木風にちくはふゆる寒さ　〃　東京　時雅

きのふ迄尾に唄ふ新宅　水代　九如

近頃に上り秋の音しろく　、米濱

何を売るも責るせいしさ　サノ　山右

利棒を浪も今年の暮限り　、光月

先蔵すえ来る暮をまつ　東京　二宗

立ちすき一箇い掃出別しき　、鶴雄

干つる白山の残る日の影　、志芝

紫の葉ある産の乱ろうく　、湛陽

指に縫る風の青胃　、長鍾

花ふゝき跡も黄線の野の道　、家濃

担おろ浪も秋の手取る気　、道州

つ年除のふ役い重の前後　、青松

気にのの刹く人のかり人り　、竹夾

近風のふき雨の下宇と山の月　、柳州

来る又の秋除し一の夜　、得玉

袖の露しぼるる恋の哀れし　、玉米

探の袖に探ふ数ゑす　、子童

○

良月も松にうつりて座敷　得玉

積もる石の中にあくらも　青柯

上野に拝さるゝ木の名に菜蔬し　松史

あらしの杉ふ人傘さして行る　玉来

何處となく大きく乳なみ風葉　松

清水のこゝる杉の水仙　泥

豆腐をも車にく里に酒のます　条

さびしく解る芋の花まちなる　史

夕立のこれ間にぬるゝ柿紙　泥

他人の中で辛抱ゝむ　松

梅實も足もとに来る黄ばみ　史

未時なに線ちらちら焼米　条

新しき目の話白の吹しく　松

青年縫ふ村の地芝居　泥

晴れ餘声さくらの以今年連　条

新しき娘来るこゝなる泥鰌　史

襟くさ風花の黒白の緒る細　泥

刀なき世の春れ根　柯

神楽殿に翁のみゆる旧ん　史

左右に目立ちて桜杉　条

舟の師匠のまなび綴しく　松

秃の頭を蓋る茶臼哉　泥

和尚借物の肩衣を引かけり　年

あくゝの立て雪の降かし　史

門にも一夜をさし錠の借　泥

持し藤の都をなやらし　和

つくまなぞ深く染る意へむ瓶　史

難矣尋ね遣へる竹むら　年

酒売を祈りも月に向ひ舎　泥

寒の戸さしに捩る盤　和

栗飯を都の客のめでゝかり　年

白の中に白ふ粉ゝをり　史

何事残を集て戻る從ゝのけ　和

留守借して見世構のよふき　泥

大のしさの花の勝も四方の暑　史

鶴の禰子舞や恋のうらゝこの　茶

○

身も浦そ枝を捨し春の空　宜峰

青ゝそ目立ちつ花の藍　玉水

雛の巾ぬるし灰つ客頂て　松史

辰り心に騒る若葉雨　峰

たふしこ月のもちれの汐なかり　来
紙の宣しき砧打拯　支
掴さくり襟わらき立く　峰
菴のうちにたれつ留しかも　来
冬着を嗅つてまくる寒氣　支
あやなく雨つゝえ留守守　峰
捨よせし榰のすわら楫の和　年
陣屋形ちそ残るひふ山　支
来人の角力偉げ月の秋　峰
ちふりさし廻す葉の錦舌　年

いやみて窺さいる蝴蝶の結　支
不自由勝ち本尊の誦経　峰
蕉の絶え屎に添え花のこりも　年
他さく寒に労る高鷹　支
巻の句も拝よ掛る旨このふ
セツ分掃ふて嫁のお棒　来
序ての掛ちえて待女房　峰
廊下より引霊間のさり　支
不梅の咲上へ覚ゆ水も噌　年
梟鳴やゆるき竹藪きさら　峰

カク　サセス

學様へ物賣にくる上臈さん　ま

時計に合し石町の鐘　朱

浮世をハ通りぬけたる若隠居　峰

花の縁ふたゝびさはりし縁　丈

峰に見し月を以つしり明近く　朱

家しまよひし笹蟹の糸　峰

高麗に男の白ひ帰る衣　ま

まことハそれしるに既に頃殿　朱

外刀の香も列つき出陣　峰

子のたくみ云ふ米の騒ぎ　丈

花の中居る雲雀の翫り　朱

春風ふくさゝの道静なる雲　峰

右明治七年二月某日當月満尾　合十二句

支度の葉もほくろ敷わたしぬ衣　杉丈

宮もと松の葉を落る音高し　鶯峰

若草の一日しまる足をひて　玉朱

云はかる儀肩のしるしはは　ま

浮世にねて待身の餞別　峰

家ましひのあけぬるとも嫁び　朱

女房ひとり皆偉よれ角力　岩　丈

うかうかと待てもきる春く猫　峰
世話しき気さ更て大戸を打つる　年
時雨明りを侍る傘　丈
撫て図し姿ハ出立人　峰
浅くてあれと云ぬ峰井戸　年
昆されに月を情して冷ぎく　丈
形りも掛しう見ゆる小男鹿　峰
吹つゞ鞠る栗の十斗り　朱
若ハ寝て年よ見ハ鬘の毛　丈
去奄の茶ごしらか乳花の嵩雪　峰

立うらしてもふさ白　朱
擁在て遍も書楽を太平絵　丈
執師を届く静を絞文　峰
今所て庭絶て多の年連歌気　年
言とをめる何ゆゑ何等　丈
崇まよ夕顔との庵蒸す　峰
隔下鎖て緩羅もこのされ　年
丸くて年も分らぬ鳥猫　丈
手始を首きれハつつ人会盡　峰
打つまよ又雛画を云ふ風　朱

月何りふらし保津川高　丈
艸市も引込ハ後の藪茂　峰
角磯ら猿飢ゑて来る　年
さつまりとまく縁砌の亀　丈
高史繕え苔亦ら泉　峰
六の夕を上手へ荒ゝ信行　年
青偃味何る田ゝ田ゝ　丈
抑はえく千鶴傍に春閑ゝ　峰
差移も傾きも光る白演　年

明治九年一月十九日於□□　左ノ
初雪にも年も宮に詣る　玉年
家の前さへ目立門松　泉峰
たいらと嗅へし鶏の子を啼て　松夫
氷深き人の氣もうく　年
帰るを袖まで霜の月　峰
四方の春を笛にふく笛　丈
業いと見え女房の膏ひき　年
口の先のよき嘸し友達　峰
裏川岸へ迎え小船に遊ぶ樹　夫
初船忽ふいに持込れちまり　年

雲か霞か衣着て出る上り　峰
道の辺に紙封もつまぬ　史
日に来て見へぬ月のさいしと　朱
工に絶し鹿の垣　峰
楚ねる蜀黍の根をまくらき　史
勝手に雲もやさをきし僧　朱
路傍の花を家にて薬をきし　峰
つかる日向しぬ藤棚　史
居眠て鳴るを手ぬ綱楼　峰
連の影を追て楼台　史

蔵に眠る木陰に村まで　朱
破れて小音味の立まち打行　史
生れ違ふ傀儡の数の生白き　朱
立離れ京より孫を携　史
風呂敷の陰に手を腕の上　朱
錦紫の七屋に出し道留　史
いつとなく居眠りして細工　朱
立もより何の人も宝　史
庭の上を見るの下寄る月の夜　朱
雲に急ぎて宝庫まで　史

縫ひのきゝの袖大きな淡紫蜀　来
通ひ神も由りし　上ゝ居　丈
鯛もあり鯖もあるさゞ波　来
汐木の標ミえ　安隠　ありり　丈
此ほとゝ氣の陽炎にありきはし　来
捨も置かりの葉　一房　丈

○

鷗の所嘴ゆ進中
明治九年十二月
玉来田窓興行
冬枯や柁ぬる見ぬる越ゆる　玉来
小舟に乗る春寒の菊　南海

う

芝敷人を細此を吸ひつゝて　来
温泉の印錫字呼ぶに行る　海
ひのらしと大きな月の嶽の空　来
まゝ一ところ桜子四五十　海
舟渡ゆけまて道のみ霞く　来
かゝえ帰事もゝの秋に迚ゝつら　海
傍笑にまで以外ぬ西わつ乳　来
竹さ涼しき臣社の庵　海
よそ見に花笠のきそと出せし　来
馬に鞍置我帰の中う　海

はらして通ふ扈従の宮つくし　未
名鳥はつとつとる遠火　海
新ちそ探しゆきし椎柏　未
櫻紅葉を花と翁自　海
両山の並んて寒ま夕暮て　未
鐘楼家の鐘つ鳴あり　海
大坂の東家うらもし久しぶり　〃
恋らいそてのんし世る人　未
手も文武うまい爲筆の専か推　海
浪速やゆきし吹きまちうつ　未

菊さの関らさと鐘聲は二九さまく　海
八幡はといひ来る綱信　未
日和よく塩を漏し三の寄　海
春ひ鳥雅なつて鳴る　未
油よしとる以としのあり余り　海
稲の世並の出来あり汁　未
十二阿の太鼓とよめく音の月　海
橋ふふ気の町は泥傳　未
名物の餅子浅菜の並ぶあり　海
何より嬉しい不二を西面　未

萩のさく隅々に浪もまつへりて　海
花尾葉干 しかれいこちら便きなり　米
空の猫も忘されしく座鏡　海
人の座作ましれるこゝろふか　米
○
雲の肩縫る夜半の纔より　杜央
薑しつく葉る　大縮　羊米
縦もに縁ふ気の人も北し　丹海
声つれとるい生ふのましけり　央
新浅ふ添まうつる鏡の月　米

すゝの花て萩もに見ゆ　海
紫も役ふ再叱の枝の伊丹酒　央
日まで山も以ぬ名も　米
鐘のふ別を館の目の傘にて　海
定の峯を不二の入梅晴　央
枝風の系手に志る長提　米
覚て折らも俤の別後　海
寄るて以んのこ稲けふの月　央
向ふ眺近く下げてゆね　米
新茶を中羅との宮に会を　海

古傍に筆まて面く風蛙　央

歴くて花さくらの笑ふらく　気

湖そおろ内られる冬の館　海

霰しハ窗の立樗の新禅まて　央

雁柏子に唄ふ仮寓にて　来

園に傍る臼の佛を鼻よりも節　海

麺棒られハさとき能登お　央

うちて物ゝ梅哥へ氷り舟　来

けふハ湖水のさゞなみてもね　海

古今の志こゝ之入れハ鶴舞ひく　央

仮名の手紙のよこみ文　来

初のハまいせあめ箒目のふるさとさし　海

嘆啾ころまし恵縁のかり　来

中乃ふ月の連歌の浦信濃　央

鐔の繕て一ツの熱葉　海

鴇師よ絹を立まておゆしかり　来

西本を通る山寺志の留　央

大空の泉つゝめぐる比叡の花　海

ちらりしと白きし浪らん　来

斜日に紫て表ハ曲さし花の雲　央

作ほあらし下に稱し　ちる　海

○

鐘ひゞく梅の日をしみみるの梅　柔

まち申く眠る山の菫　哉　杉丈

手折は花の後を引拐て　其角

清ゆり蓋し童の節定　保玉

雨おのうへはのあし月の羅ト陰　二京

造印者にも佐中伍　朱

蘇つきて代るまきの上総者　ま

大も領人の約束はよるまて乙　海

こつくりと儀へくのむ文字　伎　玉

眼下にまるも仏おく魚　朱

桂子啼くまゝあるに夜のしらしら　京

青芦さらく夜の入堀　夫

売時をまつして米を積こむね　海

一樓啼しに屋敷こしつく　玉

可なるに越後そたての去の國　朱

桂木府に其つしてかゝる　京

花さく錦おく迄く康咲くし　ま

面雪の慢くぬ　南氣　海

表の駒繋く門は柊酒屋　玉
力自慢にこうてかふ居　朱
只知らぬ名を知られたる田力太郎　京
皆揃ふ首傳送る伊勢参り　吏
何様も金のうへつく小百首　海
七時のこのねに空の加留待　玉
書以ちは以そとらぬ習りに如ほしく　朱
柊の陰うト映る日の新　京
西ら返船をもしみる乃至承　吏
喧嘩の如うな傳吾へ後る　海

さハりなく空い流れて日の宮　玉
晴にぬきぬ傳眺くつつゐらゐ　朱
夢しう孫もしめる跡響中　京
流ふて髪のこるさもうなり　朱
元流遊して可るに文房手つ噂　真蔦
手花の内に傷行料理乞　朱
来てこれい噂子書る花さうり　京
濡れて青い道の家並　朱

○

痩枝の咲如ある卯の菊新　西休

花木の精り場ぞの之　二京
春の錦を網捌にいざむらん　松鏡
捨り掃きくしむうちに緑り　玉来
外賦の気まで届る月の稿　京
退きてちよつと曲の女萎峰　佳
ろ吹雲に登りろ唐風の二枚（まい）折　米
庵猪が子に乞て遠かり　新
むら雨に流れなく濡る春錦織　佳
布目尾を晒ふ如く来　京
山茶花も枝来も陳の行ときき　新

十夜崩れの花めきあふ身　米
無合の船も中し一寸也は　京
鶴の顔ふ賀鈴の生魚　佳
能くほしを高ふ節ての古い鼓　米
語再同士の噺し出はしき　新
債き積き花に重ふなり　佳
春の川糸のごとく山し　京

○

川風に先夕語き花せて　松丈
山されしき下は向鶴　玉来

鶺鴒尾の振向に鐘ふれて　石堂

声の太さに萩の露かな　史

むつくりと騒ぎは抜きにし露つきし　米

桜は黄にも白ふ胡麻売　堂

去年見しとれ起し綱の裏しく　史

蕎麦の時はいち気の壮さ青　米

笑瓢の曠る影さえいかの百子　堂

雨さりあかる柿の生垣　史

肩衣はきつまとしさる旅振　米

碑にも銃の剣さ剣刀　堂

総ちすに揺も幽霊も月　史

言葉ごのいしを通る留守　米

捨こして今年苗を払ひ刈らこ　堂

古熱折しも庚申の宿　史

蓮子は人の集る花の市と　米

燈籠の亦まりて郷若もなし　堂

名緒さえ見え日いり通る数珠く　〃

大将らしき兜はりもも　米

木の根く溜る水の苔以味　史

蝶とられて軍のまきる草　堂

青くても星まりに碎ほの角　朱
瞎ひくれて薪の刃仕舞　丈
菜ひぬるをしさ書画を吟このよ　堂
雲との通り迹し　碑　朱
茄子をおろし大根に串を一のせ　丈
新酒一瓶を一ま呑干し　堂
家居して隅なき月を皆抱　朱
ちくと鳴るを枝の寒さ哉　丈
遺るさしる程なり琴の崩れ元　堂
揺りそ来くのもきれぬ振　朱

ほつたりと芭蕉の布も夕もみう　丈
とかして押えて四五旅脱ぐ　堂
安持も二枝に餘花の中　朱
おとむつく田へ入る水　丈
○
雪の炭ともされしぬ郭公　松丈
菜蕪に道を爰も青山　玉朱
ゆう掛手こなれ右を流り合す　丈
に朝を濁りに渓し曙井戸　朱
藍しなきさある虚（かう）泉の浮る月　丈

咲きそれハ雲の間止む　禾
隠るゝの栗一つのこり鶯　ま
冬されし咲きさかふ篝　禾
隠さるゝとまる蒔積み眺め居り　ま
まんまんとして押く　灰吹　禾
小傍れも新とうる　舎四郎　ま
読むく桶又売る　夕月　禾
纏ひさる荒野持寄の宗会風呂　文
抑ふ置きの三冊る足　守　禾
陸牛も新刈穀の積まつき　松之

松さへ指す日のあつまる　る里
咲き竹花に溢れ　籠五歳　禾
燕の薫き　落葉掻く　之

○

身に降るも菜花にいまき　野菊へ　丹海
きのふの夜を　待春に　月　玉禾
網元の鐘とれ打ち　雨に濡れて　海
押ゆふされのまいる　伏篭　禾
年弥のあはれは葉の音かなり　海
田中しら出て　捨ふふさ日　禾

以佗作して紛衣の箒以奈　海
戸ハ以ちく鵜する夜盗　年
生き後も慮いの黙の山寺　海
領稀呼ハ馬の啼く　年
錦市の野辺も涼しう引ちる　海
硯のほとり吹き寒ぶる　年
新焼に籬掛け稲ましほり　海
社日近く下はまつ雁　年
鶴山に新八京の秋の月　海
鈴きし賣と京にくうまる　年

風やとる手えへ聞えて哉さくし　海
梅されこの一行庭の条絶　年
いろ鶯入の来くてして伸より　、
芸尼と以へい魚より好　海
梅えに継ら居されく縷首如ふ　年
えって呼るのこのる夕雲　海
淋しさハ二本梅れ若葉時　年
連退きとつれて人の口より　海
紙芽の恋をよく明と嵐程て　年
以ち掐ためる朋の表れ　海

うき草を集めて保つ縁　年
椿は若葉のまゝ蔦の内　海
此寺は月に紅葉も名もなく　年
下冷つめたし池の夜更けし　海
有職者と遊びの者は吃りけり　年
猿を居れは猫のうるさかりし　海
焚てられは脂ぬ丸以来　年
此世乗を見廻扇ひ　海
四五日の湿気に逃ぐる花のさた　年
猿に引かう綱子のこゝろ　海

○
草の何内は忘れ小葉網　白海
雛子一家に秋寒き月　二京
行秋に逢ひ茶料老けて　青堂
桟橋の舟の又も着湖　石重
今宵も独二人三之酒の宴　玉年
東より遠く白ふ庵華　海
老松木の落葉の下は菊も咲く　柳隔
様子猿を居る隠扁　山園
飲まれは俛信夫の絞の縁松　青柳

あられしや冬に磨きし鎌判　京
柳かも雪の連歌に積らせて　恵
河もふねもなくなるの梅咲　亘
起されて野分し顔を向ふ也　米
身の余波をきりし江の嗚る　滴
鶴は川を霞こんなかく皆おされ　海
蕊のゆらこも水吹きておく　重
芦の穂の吉原なつかしき道こそ　亘
秋いたの一線の枝の桃　壮英
掌找に帯も揃はず蓮らるる　杼

秀しきの三日月る嵯峨　央
国々も冬よう伴の如きなく　遊滸
一すいよめ月日の一字居　米
広き人の集まる夜の夕　園
長持唄を以て涼しさ　須玉
江の島の貝の屏風の美しく　ゝ
日和つ子立子借る者なく　杼
つれしと秋の声吹く一つの船　京
買ふて来く中なき大根　玉
菊来の日頃え流るる光し　杼

まく地しきまおそろしき所　史

おもかげとまいらぬ草のもとにく　湖

去ぬ影ひ神は佛に　朱

何方も緑は見し不二の山　玉泉

○

玉泉病中参文あり　賀

酒ふくし秋のあはれ松の翠　松史

吉川も晴てころよき月　菊窓

了論る新緑にふくらし常　玉泉

處ろ清く遠近よある　遠湖

小松根帰子とえぬ気相に　窓

誰ふて盆く草の露哉　史

宮古の神事の日よりふ迷るなり　湖

頃里の隅よふし　妹　朱

風の情は空洞の綴よふまれ袖　史

鶏えゐえて蝉の打打　湖

笑も上野も留る旅の帳　朱

こゝ朶のとし風に作る一足　丈
宿する程經よとく月の作　渉
じゆ川志ずる寄をさし白萩　朱
時ゝみよりて地はづれ新木繁　丈
紅ゝ散るに名を忘れたり　渉
春ろのゝ指口さそれる花の本　朱
錦のさる日を鶴し舞鶴し　、

○

松王う賤よぬ色め山の緒　玉来
大根團ふ日向えさき　魯吉

流り個と茶筆炊の總眼て　杉史
勝科宗の长ぞ刈しさる　魚
萬瑳も朱く傳慕も月の宿　雲
くれる饅よ篇りこしらへ　丈
勝白く尾紙の路め續く声　朱
寄たくつゝそ茶ふる講鋪　雲
植ふ日そ織子ゟ古話の啓鳴し　丈
弱みありたる鐘をさゝのる　朱
口輕れ茶ご雲風よ經きまり　雲
彩りもよき木雕人形　杉龍

夕やみにきこえぬ身にはしのり　朱

つらつら路を押つける小菊　二京

何処生まの秋に実きを□□く　新

倒しつゝある女郎花くずれ　朱

梓弓張りまはる花の夜　雪

虫へさえ畑に鳴き見きく　新

稲以解きハきらんに稲の舞ふ　二京

買もしなかね月の来る　女体

竹沢より手紙の来たのこと　朱

この一本以へまかる塔の島　新

新了筆を小菊めて宿寄せて二三本　杜夫

熟れる鉄線の咲くこと　雪

酒蔵の稲穂むかし花楓　李々

豆喰鳩の胸ふくらし晴　復静

稲穂を唱れし人を折忘れ　来我

木の枝も蔦紅葉しける　梅実

○

田代先生追悼句ニて

足年を知る迄ても植し柳かし　田代先生

内俵之挑く橋の簾　日精

学の為も影り玄へ途く　田子

蓮の上ニ手揉心の涼　一孝

ほんのりと棟ほを昇月の影　二念

新酒の酔ニ古の曲ぬ　昇鉄

秋の夢古今集を従ふなり　一止

何ともてカと書き暮れ　行鈔

走菜子人を何れとも知らん　家河

民神大空へ日気を去る　香岳

うきはしき中も以つかれ陽され合　山園

何處へのことなく葉ノ來ニ風　寓兵

蟋蟀秋月を上り得の此初　玉峯

濤を刷る漁夫の伽き　壮英

一願ふ茶の湯川越に借る様　梅阿
咲し出へ出雛出す　寿玉
山独活を竹の皮にて抱きつゝ　可重
面白さうに戯る　餘　柳阿
○
すゝきいやしう取りし鳥かな　可休
出穂おちし家も夕暮れ出　玉来
川水の淀ミを楽しめてつくん　寿石
児手を膝に明る昼寝　休
大江なる月に一陣の静也　来

雄より絶り松むしの峰　石
下帝く縁のお庵を叩きくり　休
急度恩へそ出てある夕　来
内外の概子をあたる火屋成し　石
後借異にする人そ絶ゆく　休
ちらぬ間にもつと大きな呉服店　来
ばしまぬ船をつなく汐合　石
可休　寿石　あき走けとおしられく
折からめ
月の空く猶り経けし我身かな　玉来

行人を東風の見送る小笹原　杉丈

雲雀の声も来て偲ぶ也　丹河

飾に添る蓮を露に摘みけり　支

一寸茶附の客はなかりし　海

何処かの此一ッのうちに昇る月　玉宇

身にしみるぞ給より出る　石堂

菊えんを得まれて酒のあと　竹栗

評判よりもまさるいのちかな　青扮

初鰹深に栄る晴空の吹ぬけり　二京

大晦日まで打水　諸玉

紅葉の二本さえ見るなき比　魯岳

鳥居迄の鳥さえ来なりけり　遊羽

よい身に思い近きて須古の浦　山園

戦うな牡丹に示せる寒さ哉　柳閣

角力さも的まちつかぬ暁年負也　寿玉

寺の僧まよ紀く白犬　恕斎

雪けさの紅織ぎる花盛り　梅香

今朝は細にうつしたる暖　茶

涼しきハうつる寄し女傘　玉武
声も稽其の葛陰　護静
芹摘の丘へ摘皆少き杵て　朱
屋根ふく萱葉の葺りかへし　静
赤しと日の入上しミゆの月　朱
河魚取續く江口川節　静
紅色とに新緒からぬらし振　朱
浅茅の家よ似ふいみさゝき　静
蔵書としてハ恋の跡しく　朱
形文字書く詞のなかぬ　静

打道しく来る須見えす　朱
比良の高根も夜に越ゆ　静
茂りのしたぐさと月の名に連隠　朱
鳥の啼る通して四床ゆし　静
是非急に深寝ハならぬ襟衣　朱
老木吹くさしの花盛　静
誘ける踊念佛の額かり　朱
風情を洗ふ氏餘寒の新　静
色ならぬ秋を賣る古錦錄　〻
馬子乗りねハくえぬ蓍術　朱

壺の石碑の跡中にゆるきて　静
時雨して黒む萩　米
新古の名画ときゝ蔵書あり　静
帰幸もかりと鳴して居る　米
高麗の女も立つかつて居り　静
字はつきしかめて遠への門口　米
本阿弥にかきかねぬ縁ゆらぬ　静
ほろりしと掛りのゝる萩　米
面白く影のまたゝく銀月て　静
鱸のかたなすも哀済　米

寺門まりと待ちかねる夷二州　静
遠山からと猫にあふたきこゑ　米
雲雀を呼ぶ禅のときゝ打込　静
人にはなれさる近所の雑子の哉　米
老みそてまかれ年経引着　静
千尋の湖もめでし蛤須　米
花

月の名に一日五年国復静楼に来り我白に賦せらる
彼蕪流致の文法を手本に似て其文句鯉鱗
の教をうけ見とき(?)のことはとさし合のうたうたひもあらん

よしなき人ゆるしくさ

○

正月からも其きさらきも言なし　古朴居士

鶉なく鳴くや野の広る　併　浪花の人 旭扇

草の餅先るま併ゆと揚けて　玉朱

走られ飛ぶ八条の葉返る　扇

うらくと川ゆる白す乎の月　朱

嘆子の羅は云らなみ秋風　扇

稚はまる初冬れのおとる　朱

遠きに流かりぶ笑止なる萩　扇

うすのかそつと読をえらる　朱

鳶さ過りよも来る木下露　扇

牡丹咲ころ雨れど縫ふ姿　朱

寂さ欲しも晴く月の涼しき　扇

白菊に客の言ふ亦ありと　朱

角力渡りる人の寿分れ　扇

大いなる脆さ落ちの下薬師堂　朱

此処は咲く花ふ網　犬扇

あ庭くし積る桃と帰れの里　朱

宵翁ゑへのらしと明く北出　、

笆を潜りて代達く小道　府
村名も古く風俗のすこ　朱
内儀も古風佐衣の針仕事　府
筆も惜しく浅く嘆あり　朱
格別の秋色まさねと年忘　府
勝しうよる池の水ぬる　朱
折しもこの老後の我まま　府
朱者とある所感嘆しく　朱
何となく思ひ出めぐり順礼子　府
格を以て書して美濃を信州　朱

蔦かゝる向きの庭のさし添り　府
確礎海まさ島の鐘達　朱
八九分を穂も稔る里の畠　府
上手格はこうちね画作御　朱
口気信座以西方とたろまゝ　府
鶏鷺と梅の花似とおとさる　朱
花の鳥我山一生以て吟達ひ　府
このころ此筆のたよりし手ー肴　朱

○

信の照り験も小異も以て人へ安し　猶錚

月さへ見ゆれ秋のうらこの　玉茶

袖白き蓮の露を宿しつゝ　静

暁しさ侍しよ以ありし　朱

隣侍る青み涼しき精操　静

香よ谷飛る玉露ゆきく　朱

折よりて森裡草を刈る　静

本家のうしろ峠よ兼ねより　朱

藤花も実ぬ折り実すまく　静

今年も以前寄以こととゝ　朱

若い身よ何業集りの菊隠し　静

思ふ人の声の御人　朱

新通しよ木夏澤のうちる日　静

梓ま新折一人の一筋　朱

梓鎌も一のあのかあることは知て　静

岩根よ休む峰入の信　朱

花の餅香の君朝そ面白き　静

乃るに扇のこゝろを知る内　朱

持て見る墨の書かれ落しく　〻

弱さ志の絹よ字以長き宴　静

抱きしと知るまつきり者の苦憎(カタヒウ)子　朱

たしかにもさすか繁昌も秋の風　静

錆刀の光さへ二年ハ覚へけり　年

然雲霧も古き小梢　静

山科諸都の窓に閉しけり　年

好このみ猿作とともに菊代　静

たましくも木より雲の幡もしく　年

此身をはなれ、悟れする秋　静

真この都る世にもつれも朧月　年

寫照して孫枝の其人の　静

朧月ハ寛さえ紛れる葉の裏　年

猶此流をかき捨しけり　静

孫してき筆を手紙にかゝなあり　年

誰の朝起しらんな井の水　静

花のえすも屋初れいふりにのまり　年

気立の筆のすける春らん　静

右讃静と年両人九月十八日午後二時より始め
同夜十時に至る

○

余ねいかゝぬ景ある鳥雲に　玉成

金屋生ろ猪又立の卯　吉我

おゝ鳥鏡ひことかつきらん　瑞静

久しふりなる人に逢ひけり　年

若こそ舞ひし身を宮に召れし　我

青ざめし笛ふく秋　静

椎の宮を上臈達て夜あかされ　、

陳れ来る身に鼻白むなり　我

忍ぶる恋歌の題てさし遣り　年

時雨あくれてあられ降出　静

耕す葬を遂る道の程　我

残を恋しねは涙止め見送る　年

月前に蛤商ひの使ふ孫　静

汁の肴を添へし鍋子　我

湯さめの宮も身に覚へ　年

襠中程に猪を出しける　静

初瀬も先穂り咲仕舞し　我

似我蜂の巣より猪すす所　年

鶏黒の味にて通る粟しき　静

主人思ひを懸も営めり　我

隠納戸の帯にとこぬ昔めく　年

宗を離別に遣ふ孔含　静

粒其の命も何もしえ極り　我

手一ツに孫は法られない談　朱
蔦はえて軍も嫌しらふのまゝ　静
庵を潰して建る小ざしき　我
青柿に落しハ好うさけしめ　朱
卵を産て出る鶏いつもゐる　静
内川で月の光しらぬ宿　朱
色見を染りて済し一段　我
り秋を吉書には香つかれ　静
出以猿に位授る　我
伐のうちをまちなる裏の山　朱

八重の花をえ人もおなし　静
永き日の割には用もまのたくし　我
咲ふ梅なる表の緑の為　朱
○
市中残おり鳥ある秋の暮　玉来
那にの綴り糸て三ヶ月　常声
子供あの色より物を捨まて　朱
梯ふ併のうよらく橋の間　肩声
上染のめうしく遠く緑蘿　朱
米ねさまへれ何ゆ色罵金　吉声

書付に周宿を張る芝居茶屋　米
読へとつゞり続つくるらつ　芦
道志と連てさらし　えふりし　米
三めぐりいふ秋のつまり紀　芦
客ありし隠れいと思ふ重え止　米
夢きく酒清節審の之流　芦
千年経して此の角力の即赤穂　米
我等筆申る偶探れ月　芦
続飼う鳴ハ鉦飼も鳴ましめ　米
活葉海ましき寒の静まり　芦

く

中原の花は玉椿も掛並り　米
芳居れ扇のおもき御解　芦
峰ふえて果くろ荷ま未疑角　、
余の呼ひのさそも踊さら　米
之る慢の暑ゐを利くゝ作力出ん　芦
めぐとくゆ良は昔良又手ん目　米
再し心焼は宮にはお居の置く　芦
道経の思ひを遊ましくそ々　米
夕風のそよりと葉薫る蛍桃し　芦
沙のきえぬふ岸の漣　米

餅さへ売られて猶進ぬことをしさ　芦
進んでも米まる心者の小息部　米
なるふれ退きて捨てき月の皇　芦
粉を洗ふて精まる文範　米
藪寺の藪も花のさまに枯て　芦
大きさ道る(入り)か夢れぬ踏石　米
枯楊す道をゆれて生道辞　芦
浮気じやうしてさ笠の里従　米
茶介の下もまつ葉みぬ相のむ　芦
蒔をつけ餘のとさ蘇　米

西自中夷ぞ山も笑ひたり　牡矣
雛子はろくと鳴くる虫　玉米
鍬鍛冶も耕時の精ひして　芋栽
桜も見むかぬ何気しし　永年
深光へ浴みりと漁れる狂の月　米
野わも風しけさの浅瀬　史
失よんありと引きを年も秋ほしく　年
五百ことしれるふの女代り　栽
不京さの候かを利くるま神　史

都寧國て書く提録　米
色鏡て白粉ぬる手紙くらく　哉
情しらぬの秋の夕立　年
秋村に菊ゐらかゝる頭の見あき　米
見る手業もつけあふきたり　史
言はぬ銅の屋錺を杼曲て　年
辞世とし升屋空の近し　哉
昇道の花頭つ出けさゞさのり　史
今年も鏡の素口しよき　米
いきたなく身も慈み起されて　哉

隅茂く来の見ゆる寛中　年
柄れこもと河岸の嘩呼に投ら嘆　米
紬縫つかし被引し伊達　史
新宅の本多もられしき出遊のう　年
餅のうつりと暖ふ立蘭　哉
母の称を賞て香のおくとなる　史
盆過寒くなれし悲仲　米
別世界とも呼ばる下郎　哉
逃てみり堂く孤ましし　年
花この下大きれ月らあらけ　米

深とあける桜のなりけし　史

青鉢むさく畳ふいきしいぬ　年

剣のも絶えとも江晦日　哉

先細の高剝れい立流なり　史

天保銭借さまて寺園　米

小金井の花に十里のたとくし　哉

掃きて捨るいろも紅葉紲　年

○

張さ〳〵篇黄れてみよ太さし　芋哉

焚芝ほうらも冷まじき月　永年

貝鍋の鯛の吹かしそ　杜奥

ひちふるる伏せつなり　是米

慶しらし鶏塒の朝も日のふく　年

来年お金楓むしは　哉

蓮の花につもる花のまらふさ　米

世経息子の気侭もすむ　史

何る中の碇も挽地に　哉

世のふこれ来る峰きなし　年

青信も白露秋のまたのく　史

まつくり草を冬枯の月　米

貝侍に河豚を提過る酒屋　年
足音ちらり来の来まゝ侍　哉
額出へ捌る額の立流なり　米
実こゝろねもいまれある　紋　央
色の音にうきしくとする説ふりに　哉
啼て此きて　黄昏を　いぬ　年
六条の古鞍のあとも虎如く　央
楼樋費の井つれなり　米
搔条の山も書なりて色上り　年
二階明り船いかと　哉

息の音に帳中鏡常見て室　米
頭終なき罌の綠しき　央
紺なき完て百もに読さう　哉
花入綿い籬りきつしり　年
書院になりて在不入卯下り　央
ゝうれしい時も濃いしまうく　米
水鴨て月の芒もせいしくと　年
梳のふくとる脂も手婦の香　哉
伽の新り庵をいまれて掛しつ　米
一の高衣て完了武町なり　央

ねふくる子を引く子よ家のもめて　武

秋さる蝶の文もあとのに　年

夕暮の纏にあかさる芭蕉かり　史

晴曇すかりと此くこの札新　朱

○

新道く来るや栗山るの新不し　亀山

照く日御よこらさ夕月　玉来

筏乗り焚出く人餞らうくて　乙重

留さのとよもる声の大きさ　山

書つみきよ豆腐静かな庵掃除　古舟

とつと袋を着きる蜂の巣　重

まるく汐よこのくれのまする葉の南　二京

連さ退くも本らり后くれぬ　朱

無情の多以人目も妻しられ　後静

后窓めさうよ立すよあるの館　丹

風もなく眺よ木の葉音ふて　山

通り行と声のこの后冥のう　二京

夢ぬ百よあまり棉ふ身の照り　重

鐘も貢もすこし著咲く　松翁

大根を並ふ角艇の新挑ひ　朱

年てまされ外も見へつゝみ秋　山

馬の鞍気と鞍乃花も咲　詠

雲と見る桜柳かな　柳眉

懐手暮を惜の錦かな　舟

湯気女の我信ぶ言葉かな　静

鳥ゆきしなき処の上の者　詠

のしてき寒も加賀の無の鍛　常声

床以ても一冊をするる青蘇芥　湖

吹れなかなかは業へ下は鳴　堂

文字すもてつつ辛き接れ　年

市目尾を探す国分寺　詠

青くの下獅子を見ける吉野哉　李人

庵ありしの道ゆらし金　梅実

よく晴し月の思ひを宿まつる　山

麦秋の蝶も付舞まつ　湖

懐男の庵まも家の色あまり　蕪村

違を離さて結をえんまで　舟

代桑を以て庵はすり思こそ　古水

料理する気嫌草一ふく　李牧

暗き秋は翁ぞ静れ庵の花　永年

立こえて舞て友ちらふ録

○

小狐日ころ出て行り善郷　淳

いそくみりなつき来の旅人　玉来

葉尾暮部をみ出きたく　永年

幕を錦のよい求めり　淳

錦糸の月のまとめ乃いつらすと　朱

ゆと南こぬ町も秋めく　年

録取のまいつくこる血つまつと　淳

急ゆくさるを屋との、こさと　朱

引袖といやとい見ぬ芸らふひ　年

四十歳て人の口に鐘　淳

出乳やら傳より風のむる京良團扇　朱

錦もうくよれと月うさしらむ　年

承小尾を何のきもなりしぬ連されれ　淳

皆年の承り錦旅の字ん　朱

職人のやうこえあれと葉の初繊　年

とりぬる誓ふえ壽の花はしく　淳

ゆく盃をえもしろむこのせめく　朱

ほとりいつまぬ録のころ織　年

春ころ馬より牛そうらうよ　埠
拾くしと銭投て見る　朱
まゝぬ事をおくところは戸そとで　年
この里そめならぬ子が親分　埠
まりとられきさる主目も出来ず　朱
寒いなうしも一月になる　年
持もたしなは汲の枝椿　埠
内儀もそれとさとる妄宅　朱
御ごて屏の子縁りみ屏房前帯　年
水の渇を舐のぬれそうつゝ　埠

春ごと事のつかれ見て妙まとく居やふ月　朱
玉へ云りささふ膝の立ゆり　年
営する和印まちに小田に赤ゞろう　埠
打く流る箇れ命をふくゆら　朱
この里き宝に二階り留れ用になし　年
さなそれ好花のさえそれをまへ　埠
私宅のきい申しと出すくうし　年
里なは云きれ統の君れ来風　朱

[illegible]のやうに[illegible]　手
其実の[illegible]　杉実
隠[illegible]網[illegible]の[illegible]　玉朱
[illegible]の[illegible]　手
月の秋[illegible]　実
[illegible]　朱
足斗の[illegible]好[illegible]　手
[illegible]の[illegible]　実
[illegible]の[illegible]　朱
[illegible]　手

[illegible]三の[illegible]　実
[illegible]　朱
[illegible]月[illegible]　手
[illegible]の[illegible]　実
四十[illegible]　朱
[illegible]　手
[illegible]も[illegible]　実
[illegible]の[illegible]　朱
[illegible]の[illegible]　手
[illegible]神の[illegible]　実

こゝろよく[illegible]鶏も[illegible]　来
隣座敷のいつも[illegible]　手
模様をつくらぬ[illegible]女童屋根　実
倚てさすの[illegible]夕[illegible]　来
[illegible]常の暮[illegible]ひなれ　手
実梅いろ[illegible]この寓国　実
[illegible]庭女[illegible]のつゝり　来
いき[illegible]一升[illegible]の膳　手
[illegible]の[illegible]月[illegible]茶[illegible]　実
芒の穂[illegible]露[illegible]　来

[illegible]湯[illegible]　手
[illegible]髪の枝も[illegible]　実
彫[illegible]雨の[illegible]　来
何事も[illegible]の[illegible]屋　手
[illegible]枝の[illegible]　実
佐保姫の[illegible]枝[illegible]　来

○

[illegible]文書山の[illegible]　玉来
[illegible]春の隅田川　永手

二宮子七歳でまゐる縁ありし　実
よろこびのよき日柱にかけ掛軸　朱
ゆふに枝桃の中より月明り　年
今宵はむかしより風流なく　実
ちり落る北角力手も桜に任せ　朱
花曇り中きこの事ある宗匠　年
弓張月の梅にとまる雉隠れる　実
雉子鳴る浅野の紅つぼみ　朱
宝十とせ情を引かえし　年
福寿草を床に生ける　実

月まで凶作の年も去りし水に　朱
棹さして北草葉桜に月　年
秋の数あまた作りいくつのたこの中　実
風邪ひかぬ北風もなく一つめ　朱
こぼれ種まきて家居に　年
うすき縁行し水のさゞし　実
安芸の宮島夜の花の里　朱
孫の芝居を見るへき花　年
秋の朝日の化粧　実
宝よりて川へ橋渡す　朱

ころもかへまでつくりの黒母衣　手
木瓜咲て風に吹出し　実
格のつまふんまてくるしく　米
ちよつとまんまと惚そめにし　手
月[illegible]の節　実
花みつつ[illegible]山住女　米
宮もあき[illegible]有明の[illegible]りつけり　手
赤[illegible]物も[illegible]　実
山の[illegible]振[illegible]し　米
秋[illegible]童経続め　手

此所花の新仙こととし私のあけゆかり候[illegible]

まへ[illegible]愛[illegible]てあり　実
根[illegible]　米
秋[illegible]の[illegible]　手
窓の梅白[illegible]晴[illegible]　実
○
細き[illegible]縁の[illegible]　須玉
菜畑の上する細き入月　玉米
蒔萩[illegible]水かきん[illegible]　松史
世[illegible]の[illegible]　玉
あし[illegible]ぎる[illegible]　米

千鳥なく声ふて青き沖明る　丈
遠嶋ふ起辞の内意を底々事　玉
膝ふ捕ふに毛氈を敷る　年
峠にて行ゑ又通し坂の下　丈
底し狗をさく別荘の裏　玉
身を打ッ流ひ鐘ふ手ふ番所　年
代名のちよまふ尽し尺八　丈
尋ね来る柳ふ月の……　玉
、ふたと噂も流る風の山桜、の　年
探の声和歌をふ捕へ拾ひ込　丈

泊をおそい庵ふ掃除　玉
汁を炊く曲定の鐘のまふ荒　年
見渡して芭の山葵芽を吹　丈
弱毎ふ人の往来ふ居合ぬき　玉
旅しらふて知らぬ中背　年
新館をたてる温泉君が猪作り　丈
花ふのこる絵の白粉　玉
又の日と以ふて岩手をおくらし　年
秋の燈の書ひつゝ寄る　丈
鬼の棲む清水役前者四五録く　玉

ちりしくて紅葉高き里　年

彩色のまくらに元し遠くの路　丈

乗もなき藤条たてし花侭　玉

書し畢ぬ身に啼の何とはなく　年

旅人に哀も立そし　丈

筋力ある綱は御山を結ふ夜半　玉

名も絹の衣帯を何　年

拙縫に交る白子に有縁　丈

、破の門の多年慾の依　玉

紙わしら天元のつくる花の紀　年

凋ぬ露の路の有さ風　丈

、

おのれ還暦の年を迎へられましける身祭の

賀するあらんは俳句先生のすゝめよりて詠みにてゝ

鉛筆のまゝを以て老の本懐を述まへ

そのなかし

若かえる心の噂の息を延しめ　柳附

絵には いろふ土営米 頼の子　玉来

菊咲作鶏うらゝかに理を謡ひて　石生

春風をたる水にのえるなるの　要河

月涼く絵つけ書てくれおそく　永年
咲免さましに任せ也けり　梅実
峯のこといまぬ咲しの秋かのく　米継
美ね暁を引このあと来る　此花
ちよつとしくとりもちかうし郎丈　常声
うちつきも作し空の籾俵　麻扇
家ともに雜しいふぬ丸火鉢　和舟
庵主の本ぬおとつれを待　也扇
習る投げ魚を月夜に買もとめ　吉旦
秋のゆくのを大もこゝろ　東桜

日家元よく出機の者戯じくなり　寿也
振ゑつしみのよのるさ出とつ系　梅社
咲花の年にゑしき宮程　吉笠
逢ひなへつゝに一のすむ表し山　玉蓮
いろとりに茶いれまじる汐干貝　梅宝
あなし草履も見直くのかゝる　竒笠
買ひはのゑく給着に古ひ村芝居　白麦
十日このゝゝ馬しらく　芳運
とりしの店蔵あらはるゝ陸れて　三千化
引ゆの飛よこゑもとゐ　ゑ等　梅さ

幾昔経てもめでたき松の花　義方

曲突とつゞきて廣いのし竈(?)　笑(?)京

黒髪を思ひ捨てし花つくり　米(?)朴

星まことを告るほとゝぎす　保年(?)

淋(?)しさは新(?)盆の月夜かな(?)　字(?)睡

こゝろうつへまで盛る白萩　宗(?)栩

道よりしるき洩(?)れの一の孔ためで(?)　森(?)龍

引(?)ぬけ穿(?)ぬけ草ふ新藁(?)　竹洲(?)

笛吹て昧(?)のゐる牛の夕かすみ(?)　鯉(?)

枝にもとまる蝶(?)そふゝへ(?)　牡(?)夫

見度(?)き萬七分の錦の花　吉哉(?)

・物(?)て俤(?)みや錦(?)の(?)の一のけ(?)　こゝ斎(?)

○

度(?)ゝ四時お(?)の年よりもし　信(?)京(?)

こまかえ(?)ひとは(?)八十年前の歌仙あり

花月和酒を呑は路(?)の人　張(?)

讀る身をしとせ薬(?)あるゝ山(?)　青杉

法(?)使ゝ卯月のねの泡(?)るらん　玉(?)水(?)

ふしも岸(?)辺に茂る若葉　杉史

面白い草の濁(?)りさき(?)花の名残(?)　杉(?)

唄ひ上手のみゆる朧月　玉
忘るゝは日ぶれ続く時る　丈
一寸の有りも焼るなり　年
澤色に半襟出て　玉
くゝき月さへ橋の欄干　梅
ひらりと柳を前は風立く　年
橋わり止ハ流れさきを起　丈
掃きくぎわりし信の竹箒　梅
・蝦蟇や侯は下名　玉
紀の志い酒して浪の音　丈

桜さく道の佳きく散尾　年
雲の夢見えて村を花の咲く　玉
春や一夜に桜が注筆寺　梅
桜山禄より舞しく鉄　魚
縁の月施の中に画てゆく　丈
こゝに丈に首の名備の道具店　梅
風も髪見て旅行買ひし　玉
春年の神をる大き家襟の端　丈
思ふほとまいぬれ然多々云　年
孫絶のるるに得ねと夜遣　玉

こくらあたるはしき横町　梅

菜ほしてあとへ引ぬ静ひ庭　朱

待宵に迎しを積上て来　ま

夕汐の舟へとめくる月の浦　梅

男まじりの踊困風　玉

追善の什にきつき机に抑　ま

帳面役に備置きする　朱

餃子とて天ぷら食べる七縄手　玉

・かくれ火ともして豊吸よけし　梅

蛙鳴元に小太の形あらわの窓　朱

霞傾ける事の静しさ　玉

○

春しくと舟の面見る日ぞ永し　石女

彦根引出し破山の松　山朱

草の餅大きく肌盆に積上て　女

とし寄似合ぬ人のまぬゆ　朱

十分な世なりよくらしぬ身の秋　め

西近く稲荷咲へる　朱

春雨に浸屋小袖濡らす露　め

昔をおもて今しきうね[illegible]　朱

思ふ事色もとまれぬ一もれあし　め
二夜とは帰る壊されし仙史へ　来
涼つ以て生きれぬと云鶴のふた　め
躁て起てさ出ふ手さくり　来
むかしの月は都ニ去る雲ノ郷　め
但らいあれと扉の鳴隣　来
さめかゝる酒ニ若年のうき言く　め
通し言ず嘆ふ裏のまれ積　来
咲と此花の俤まき奪へきこえ紀　め
追れてやうよ言葉竹雉ニ　来

二

此事ふ一時ニ空の清々し　、
寄聞も寒きくるしき　女
御役ゑ惟ゐ寺の嬢つくり　来
結のこの事んと思ゑる沢風　め
蒸つ以て劇うふ黒菊さ出羽家　来
襟白雑北行手ありまけ　め
続なとこのくしくと思ふ勝まさ　来
沸強雨手水たしく　劃く　め
植木屋のにうて老手庭のきり　来
争も今存手去く肩毎　め

あらたにしの
墨付を
再ひ…
ま…老人と
両吟して
ありける

思ひ寄ひ…と即興ハ
せしよりつゞけ…その
新…らしき…の…流し
又あるひ

○

杜若…白き…の泉　玉米
井の道まこと解ぬ涼　永年
御…旧の…て　李…
栃の…うしろき　米
与…月の…より…　年

芝浦ハ宵の間月の影さやか　年
新らしく船の走る帆もなし　め
八百も…海し暑さに　其
船の減ほと力なきる　め
数まれぬるの貴賤集せし　米
曙もかし八時の写す会　め
雲を花を八重く錦こえし　其
眺るゝ蝶のうつる錦　め
明治十八年春の日牛の角を
あらく…さけり

里梅に曲る　舊きの世事狩　〃

馬耕山の奥をうけ帰り客　朱

嵯峨の日まゝ見ぬ其の空　年

拾ひ子を見なしさあゝるたの民さ　〃

宵闇て青い月に孫らし　朱

郷寄と志つゝ三弥の錦を着　年

あかきつきめいの跡とかゝる　〃

持く来てやそれは君様な月の影　朱

晴ても猶す風は流つゝく　朱

帰りを見れし茶子をめつるけのけん　〃

旅を見るなど今朝よりかきし　朱

暁の乃ぶ博士の指は花子哉　年

面白さうに見るのさいつる　〃

摘ふ手にぬるとお屋見る川に水　朱

格子へのうぬ若侍も見ま　年

小家荒の一つり盆踊を尽露し　〃

味へは見えし藁る葬式　朱

多き見を中居物にすゑの妻　年

二度物のかりにほつと浄息　呈露

帰りくて将不めかうり典小附る　朱

嵐の穴をさぐれ佰熊人　高

借りて来し撲雉折りし鐘の音さ　米

ぬれ給ひてなくてこそかる　高

縫ひ乞し金以羽立の秋の月　米

芒の枝葉の露く戻り　高

振あてゝ刀の結ぶぬくみ哉　米

むかし金ぬ過て怖らり忠　高

母親の奇手に縮ひて金信し　米

捨ひ日知々そことうろく　高

咲ゟ花て字をし山家の市文　米

猿る肉ま雲に入る　高

○

杖の先で鴬来て御橋　貞

辰て丸さき道の弓芝　玉米

柱の毛う乙りて式屏て　永年

泣りさゝ名水をさちり　貞

ころして見てよみふ雪の月　米

風をもよるめ杖の屏し　年

中庭の猿い夜々鮮を立　貞

比でうも立ちし甚衆の稚者去る　米

焼けしてほしき枝折つゝし　年
ちからを人の世に尽す身の儘　寅
下水までなくハ掃除が行届く　未
てゝの浦町の夕立　年
客人の振舞やらも生鰒　寅
横に瑠璃とつれ究竟　未
月花の心得ありて鍋　年
色鳥も来るを仲秋の味　寅
手作りに名つけ表札　未
三里の灸も据きに揃へ　年

幾夕の世帯で若ば世帯好　寅
昼ハ日もよく爺る竹様　未
冬向ハ房もしまれ下鉄　年
華鬘も飾る住居あり　寅
看ふる渇しまの鯨を押さ　未
春の道の嵯峨あたりにはまあ　年
君如何のいふし織ぬ掃て　寅
足よりあかあるも鳴る　未
膝折て揺りたる人の居り　年
言れハ又新の日一日に　寅

大雨の車軸をながすや五月　朱
鮎にさつきと名のる水音　年
子供らハ子供どしよく稼くもの　貞
寛(?)きし子無馬士の口のうる　朱
筑紫山に船待方の屋を訪　年
小笹世きこのり淋しくうる風　貞
鐘(?)山寺より聞えて花の咲にけり　朱
権めを遂り(?)餘の世の中　年

さしみ(?)雨のもさめぬ夢見し　山朱
雀(?)の柳に中る持ちなり(?)　吉笠
家建ふ隣家ハ京の様折て　柳翁
皆(?)ふおしの湯も祥ゆり　朱
月見に生れハさしうし古呂市(?)　笠
狸(?)しこのしも日和定まる　翁
稲を組りし雲行きめとり　朱
流てハ義なく絡るあくさ(?)火　笠
鉄(?)氣のつく滝長を捨てまえ(?)　翁
悉(?)の実見え無もしく(?)果　年

菓子の錺りさへせぬ佗住居　笠
扇子へつゝみたる升の浮しろ　鄰
酒打のしえ月子見ゆるにえへあ　年
降と揃へて發心きき侍　笠
独りはすら弘まる寺の衆人　鄰
老人若衆は咲ぬ毒で仮　年
瞼のや傷咲ぬ桂て今かいぬ　笠
裳の衣かい重五の膝　鄰
柳門さけりえ出四営鶏仙くゝ　此公　吉
さ〔以下薄墨、判読困難〕

イサカヒ
諍辭

今年はまゝり芽きかる柳かな　吉丹
河くゝのるそて手て昼やね　玉
惠て見市のり身て旅かり　直
好茶荊水井膝へされのきと　丹
月はよ手採い韻す日てあり　年
久年甘蔗く鼻すし知くらて　鄰
地頭すてえ子はへられ何子里　丹
年ま仰て沈い行酒の不老　年
捨のふをのねいよめぬ見えり出　鄰
いさのひしるて切めふぬ縁　丹

あミ笠りて包め物を浴めし　来
日本橋ハそれそ流しけり　永
掃除してあとハ静な月明り　舟
明をとりの暮の大のりしを　木
扇中の待ちそる社の霧をさま　寿
うやりしとのミ遠見明ける　舟
抱さるの呉白ら通てと花簪　来
寄の便り旬る草庵　二角
鍛初のハ乞ゐる硯箱　舟
掛直として直届しけれり　来

ロ裏を梅子の命つる人とこる　寿
本家の二男世ふ相続　舟
五条よりは枇杷ハ桜木の露でまし　来
月志める年寄の法師出し　寿
以つそても全山鏡の標り　舟
彩りてハ元標扇一の胸　木
小使ふ来り明をゆてそる　寿
馬の日あらきに蒔る蚕土　舟
よしれきを作る茶千軒の月　来
氏明りきて蝶の白萩　寿

紙漉るところそ流れし細くと　之

きらりと蜘の糸こゝをみる　年

吾名おゝれとおひさる反魂香　之

このふよ年ゝる[illegible]さゝり　之

花ゝ雨る内いつも返る家り道　之

並[illegible]寿[illegible]山　年

○

草の[illegible]や小鎌の餅日和　莵乃

植出し根る蕨り摘みて　玉年

むしゝ蝶喰みて割けてし　乃

以つの手紙も出ぬ事で目出度き　年

隠とる時もまれなる月の影　乃

一つ子つ以てえくる笛る　年

済社の蒲何ふあり面白し　乃

目指へて兎角もとこのる　年

婦を返ゝそゝりうきくとと　乃

序音の庵に息災ゝ待ちかね　年

公事なさへ所連いさでいかさきり　乃

おしころ重めへのりた老の年　年

信用も蘇の月お出をうれしふ　乃

十

二ノ

稽折

菜うけまもらまし芋の施そて　糸
乞毎をまおはきぬさ打はめ　乃
春亘を生れ何まりみ徳　未
桜まれて花見の供よいさなりれ　の
尾高くしてはし折あそこの　糸
暮近うなりし漁猟の網よ　乃
新ちれ名の多以江の浦　の
孫しと亘よ名亦人ま遊　未
昔咄しを親の伽りまる　乃
うしろうか表て裙を折い性　未

面扇の裏をみせるのか謎　乃
所ゝ也の珍らしきもるたらむろ　糸
気若都を忘ぬけし夕風　乃
御うと神を口院の牛直り　糸
海を仕舞てこの帆任る　乃
月を今昇る孫子の中りり　糸
家をあしろふ芦の浦を見る　乃
悩しき下京ほと眠すぶと書く　糸
連水の男の艶り斉なり　乃
世のさまみるを以記り子甚のつよく　糸

行ばかりしめ霞の引来　内

鎮りて迎ふる神の花　米

打ちは扇より光る春風　乃

○

御掃り並[redacted]て春に乙なるや　梅暁云

稲魚の経に戦く春風　梅幸女

萬ち行く虫もかきぬ連れて七　雅柳

はるの山から流れより　之乎

月影に捨てられる象の玉　梅麿云

坂根の鳥はな子咲きつつ見えとき　梅月女

見えて梅咲き受けておる道に居る　玉玉

樹への入る風二三羽　暁云

見えて梅にやしろ行かぬ数々のうち　柳

笑ていのちかの上から　月

菖蒲葺闘士の勝あく　之乎

飯時先へ鏡の前の昔　山扇

月ならし借てさしくる[redacted]　米

探きるせいに秋風の吹く　柳

見さら形の名に笑あり気力なし　月

一のりて鳴く春の格子かな　之乎

いつとなく庭の乙鳥の巣に入て　山蔭
梅雨あけし空あくがれ　朱
疑ひもいたしはせぬ卯の花　柳
日影しの照て面白く稲妻　月
降つゞく雨に余寒の残る枕　亭
暁まで寝かしに来ぬと人を待　山蔭
よるみよしれ付て葉しめ　朱
花の散る頃の一夜の帰る　柳
とつと来る鶏又夜の明るなり　月
屋せる所に人の小鍵　亭

吉凶繰り一寸さへ旅　山蔭
連て来ぬはいたけぬ我胸　朱
三ヶ月のかゝると庭子あり　柳
夕立の飛いそ所にかゝる　月
中の宿に候とて咲き候　亭
春の夜の捨り掃子一生　山蔭
人の手をと隠して人の手轉　朱
米俵入過る辻の垣　柳
方角をとりて気の花の枝　月
孫生の祝にとる春　亭

春の水何をあやうに流れけり　梅居
霞の中に見申る壹里　梅雨
春の世に居さし以て御て　秋柳
三ツおほ菜しも作りの昼　梅月
末のもとの下陽月を影にかへし　亭
宿無おもあ町のやし立し　素丸
和うしよ浅の息し砂ほ子　月
映りてなにがしの旅の私　居
娘なり名のうちに写卯者　亭

をうはのなにおもしと紅葉して　柳
色まさて猶ら残りしおよ秋　雨
よい峯のはしき雨の擢き　月
蓑残し夕ハ稲子月さして　居
壹の雁かおあとをうて所　亭
陵の静に宅て云しくし　柳
出はれし开戸まりもいよい秋　雨
折ふとの札立てある一木　月
長つまり人の名たてし生る　居
餅をたとふ葉に門を取れて　亭

足代ありし新宿の家へ　柳

咲かし以前は人の先立たる　米

こののしと取る家のうけ請　月

節季に届いて徳子を竹葉　岩々

行くは時雨の中をしてきつし　二子

紀州の益り先留かゝら　柳

暫く給れふうしゃ　髭眉　米

四五里来て藤原の辺　月

寄すちょうりと見り捨て　**岩々**

故の持題にあ鳥のきまりて　二子

山形のおもはみがて宮まへ　柳

おのづと義に女中絆以のり　米

学暗にくらし着てきめれ　月

世の中は只浮雲に心地よく　岩々

画にしこうれあ陰あおやう　二子

西白き家の杉の木の本　柳

推した御手と遠り餘る　米

○

泣きて手本構の若ん盡かり　梅居

少世の家にめて多めのある　梅月

月ふとし川岸の[illegible]を先越して　梅守
膝つけ出しちよろちよろと来り　三米
深形も昔へ戻る草[illegible]　雅柳
側こりし乾く衡の折氷　巌石
日の前に暁り出目立積む[illegible]　月
あかりこの[illegible]めて士の高足　守
比とあまり加しられば[illegible]　米
[illegible]これとならるよし中　柳
雪見に秋法[illegible]して首尾の松　巌石
待ちさめる暁の[illegible]　月

津い侍と老ふ見れ大かたり　守
見ゆる扇子の指先山見　米
宗ひとつ新色の遠し濁河　柳
分かる配[illegible]のまなく[illegible]日　巌石
[illegible]と折てふれるる花の枝　月
僧く[illegible]る[illegible]　守
[illegible]　米
耳の上を以て[illegible]し遠貝語貝　柳
[illegible]日々八生借[illegible]の曙り　巌石
灰にもほんの寺体め　月

二階てはやりうたをさせ向ひ　亭
素読年ハ是ハ云道　圭
見しらぬ道の糸ゆき風に　柳
花はもしくろ袖のあこうひ　嶺亡
雨あけの秋て開て襟巻　月
秋の十郎て丁度咲ところ　亭
雨あらの朝鏡てゐる川の月　圭
責て逃にきぬて曲る　柳
下京と夢けて道の捷くし　嶺亡
嘉ハ鳥と思ひ杉あ町　月

言寄ハ似合ぬ人の巧り気　亭
豪傑らしき腕を見せ　圭
西ふく瘦れ倉ちて花の露　柳
出て長閑に雲雀鳴　嶺亡

○

摘草や茎ねるに秋　梅嶺亡
月をふ足し以来め出救　玉年
石ふるこし以来のまく鳴て　梅月
紫を出し捨直し煙　和柳
為ましに道て夏去る四五年　梅亭

思ひ折ふし頭巾着て　出題六

涛御も新酒で頼しく　来

手を引連れ来ぬむつけ　月

おも互に夢見慣る笛を歴て　柳

筆巻忙しく飯酌ひもし　之可

又君くれ帯の影の庭はこえ　嶺六

赤魚取ヽ小豆の尾　来

蜻蛉のよくし揚じ月の花　月

暮春に青くれやすき家　柳

乞し出地の貴人名をも御味亀力え　可

神楽座に遣ひまゐる一の宮　嶺六

さやさと花に隠るの伊達な柄　来

通りもすれ始む雅道の姿　月

口ぬきて船のおも道を蔵の子　柳

このうりとも梅供をはまゐる　可

梅えに燗出せあらし猫を　嶺六

待てるもあかりいかぬ花がり　来

迷ふけと恋の春のむかし　月

雪に思ひ見り松の一もと　柳

こや陣に恵みまいらせ印花し　可

産声高き鶏の誕生　山嶺

眼への[illegible]の菓子のこほれ　年

とめて帰るハ宵は合歓　月

きれ／＼雲の勢行風の月　柳

はらりと落る砦戸の柴之葉　子

まうすら稲りおもひ遠さぬ　山嶺

よしや若衣の里のつれ　年

手紙さ／＼遊り出れハ面白く　月

墓立てし寺の古い真　柳

隣ともハ花を咲え径のちらぬみ　子

夜の網をぬけても乙鳥　年

○

明治廿二年十二月三日熱海ハ行

逆見ハの所

明日も先在露や小春風　素邦

熱海之名の志みてなれ　三来

松の根にあいて際をすり抜て　外

離しくえる鳥ハ何のあし　年

樺り月の熱れのみとも人　外

祐古隠の苑の氣をさ　米

さまひすも名に覚ゆる河原屋　朴
猟の戻りにきつと寄る宿　米
媚ゝの女心に恋や移るらん　朴
ふりさけ見る山の根よそし　米
君かの根元のそでもよろこ升と　朴
うちなきくるゝや小座る露にまかす　米
有明のうちに椽に返とし　月の影　朴
ふかけける程に咲かゝる新発意菊香　米
たうちへとるまかせに茶碗の白魚より　朴
在す地蔵の首継て置く　米

此里は昔に引年の御法もなき　朴
葉指以とく雨のしまりつぎし　米
篠ころ寄られ新板遊ぶ　、
気のみなりに薄き手一ふく　朴
家敷てうさく細代垣根の折迎へ　米
脚てやらん酒女のさゝめき　朴
姫宮のさい治の乙のれのと絵縄て　米
光の程とひらく出る　朴
涼しさに海を屋と打なくめ　米
風のかよはせる以て伊豆の神　朴

大名も大名なり千石も　朱
猪を舞りはなやかす月　朴
菊も椀しおろし新茶の頃あおや　李
夜の川はつらし之直す秋　朴
原ふるを見られい稲るこのにこそ　朱
よつね売るる仙人の懐　朴
十ヶ国に申す中にも富士の山　朱
新甲斐に歎吹掃を　朴
人をかそ川し鳥をうさしの都の　朱
おさの年寄る春の遠連　朴

ら

おそらしの
初雪の雪になりける蓑の塚　玉和
手燭いて遊ぶ埋火の夜　李朴
揺合羽杖もうすけに連立て　朱
虎なきこの古寺の絶　朴
宝銭の銭く中より目細て　朱
まろり込てる鐘の執上　朴
色々れ以ろしてるる声なくて　朱
娘又まならり案ずけき　朴
此裄いきふ斗の酒おもひ　朱

ありし来ぬる月に吹し嵐　朴

山伏も狐つゝれに狩あほし　年

卯の花見せに来る月　朴

まくらじを笑ふて見に歌一首　年

大数の御除れやのしある笑ん　朴

腹の虫なほ声あふ加もなし　年

進風定まる鉢のときつまし　朴

無ふうて思ふて花の盃　年

燈の下に寄て目もうつらいの　朴

田 何つるも離と化るころなれや

以下つきて江華の書わしき　年

寛政十二年三月九日小松原青蘿翁七十七の年賀

諸子も共に祝儀して遊興

春の宮老若めでたや網の魚　青蘿

東風にふとさへきまりさし　亀

新玉はまつり樹ひけ七十七　呉井

由きの風待八仙家の名称から　不言

降月と瑠水の魚も躍りけん　柳居

初み淀し船の居て　迎風

待ち顔ちや亀力の殿か　仕突

箱をまいりつと内へ　内　潛浴

色の身をはりはしてなかれ　寿玉
ましろなる萬代の精　二宗
紅咲く花のましの夕鐘　壽々
何くまてゆきしの梅時の月　永年
行しかぬ村社あるの神楽かな　宗江
鯉魚は網りかさる味ひ　松歌
鍋山衣裳を何ほし長く成り　山風
佐さし陰しなかし旅見　増宜
日清よく白ふ老木の花咲て　玉成
よわれて見ゆる一夕斧の神　・

樋のなれ水子声涼ふ多録かし　梅嶺之
集まる栃しつめ教学の深さ　梅月女
衣きえすり氣の合ふこと碁を打て　梅宮女
結ふ加藏し茶を音る有り　玉成
まちわふ子嫁山はなるしふの月　月
何になれきぬ深くて晴ゆる　雅柳
道つれ子嵯峨の寄緒尽居り　其
火縄袋を膝にかけし　宗嶺之
見えつ運はみゆる艶退し　柳
油のあかし女小原れ出り　二丁

賑しきこ人りも中の屋の哀　月

水漏ると桶の会新　生

月影に盧も借る涼くなりし　嶺云

初てころる屋り戸のゆく　柳

啼ふくて青に氣のみあるあるし　寸

申り弘ても雁通借すらん　月

文書の落画はしぐき菊咲雲　来

野山をうけて雨雁翻りし　嶺云

賞ふみを日永越ゆ借る遠　柳

寛あしたる紙の藏居　寸

笑ましくに見舞て帰る隣り鷺の書　月

夏へ鱸付菜のほふ哉云　来

繁ふ鳥なくらん立のまとふらみ　嶺云

衣ふくゝて女房をあしと　柳

手拭のぬれに露ハ杜さされて　寸

偽りとくる寛寺のうね　月

真宮に卯さへ卯にこそらされ　来

米の本詣のくるふ雨風　嶺云

為なくし此春月になりすまし　柳

ころくのに振り紛ひの竹　寸

住なれて都にしかぬ秋の清 月

神の社も同し 芳蕪 年

日の本の津し浦しも静かにて 鶯

気しくも老もなく世となりし 柳

家鮮し画をくみる花紅緑 亭

木の影しそ紫の声 月

明治十二年五月 日光山道の記

青葉若葉御代も嬉し五月晴 喜邦

今の残露もそらに朝涼 、

梓の世に出れは飯もわしきかな 、

ほつまあれは寒もる続略 、

見らるま侍いはまとく月の世に 、

なな通ぬ芳鷲の音さきぬる家 、

竹風ふ炊いぞ上手府まいのれ 、

女まし男八様も尚まおもく 、

参つらそれをるかと云ふ枝並木 、

日光正路て買ふ氣岩あき 、

旅さ八官所もきれ々節一門 、

腐生てもさむ世を生まし花 、

篝目も朝いゐしく緒が有　、
風吹拂ふ悪悦の柳子　、
見て知らぬ分まてうれ珍さ　、
音楽嗅かくとうれうめる陰く　、
花の舞天津てめでたまふ作うり　、
蕎麦さへて出て来ん王子の社　、
絹の雲花御なこもりし錦連く　玉斗
請わせて手て驚るまで見てる　、
豊の花れこけておりしき上遊　朴
覚悟らしう吟るそよく　、

発て集て上へ信けの雇番小雲　朱
折もうりちる顔く深うのみり　、
葉出くさえぬ御水の時ちり　朴
龍魚の魚斬もてまやしれ里　、
出地の例なきれ迷の迫り様　朱
見出れく扇もっと候ふ　、
無無心なれ情も志まう氏名の照　朴
法の教へとれぬ座前　、
風完の呼されがやし有様く　朱
吹うふとぬる光の手の四　・

大切れ人の綱の竹に一様　朴

蕎も措し一チ时平策　朱

玉にしけ野く雁子春し押出て　朴

西寺以やまの芥川の海苔て　朱

紫のにとお下く為何の霜野菊　柿嶺之

二葉子風のさいろタされ　柿子

草鞋の結ふも雛の吹して　主米

鮒うしうねる波の大漁　柿月

鞋子出晴てる皇の月　雅柳

秋に乃高の霜もよまろし　嶺之

足北れとる霜らけ子垣のむ　子

君出て出てし知れる人柄　米

縁それぬ縁に係て君その　月

笹根の窓底にはしてそ　[illegible]　柳

夕ゑ止みに環ゐく衣の[illegible]　嶺之

君にて係しそしく道の種込　子

稲るい清子掃除扇とる　米

竹も縁ぬ汐の引しあと　月

老たるれやけして追て稀れむ　柳

指貝をし捨る花の時　嵐

一点の雲さへなき青空に　乎

百々男隠る丹使の渡　朱

産神の舞待し調べ楽し　月

蔦葉へのしる指細きめん　柳

娘めうをぞ祈る行めの節　嵐

まへゆし蓋り言おしこれぬ　乎

うつ向く身の様のうつろはて　朱

本すふし知らぬ身の小唄さへ　月

神座し賭る事をかえ添られ　柳

忠と孝とは家の光　茶　嵐之

年寄の麻とはいへど綿注き　乎

霞西向ひて日も盛る　什物　朱

星り落し世しもの読い秋の月　月

葉にこそ〳〵の珠ふしうちある　柳

華蘭そ　やぼ音信い桐一葉　嵐之

亦を隠てくらし虫の声　乎

厨りり瓷器送る土を捨り　朱

菖よ志ようと脚けり様　月

咲ひらる茶よ出家の所無ひ　柳

さゝめきさし僧正の輿　嵐云

梅は寺前なり庭の月夜かな　巳年
老て来る錦の朝の萱　芳蓮
まれ〳〵習ふ八岩の雲掛かけて　朱
盥りうつも水嵩離なり　蓮
月の秋盛の人の身になく　朱
こまれる旅たち行て来ぬ　蓮
葡萄の葉のもつく風の泉の宿子　朱
一元ともしく侍酒をすゝめ　蓮
箱竹弄子思ひ庭の折遺し　糸
川留ぬの捨屋なし　蓮
雪ふられ雲ありあり八陬尋　朱
論語はあらし広澄湖　蓮
梅花作り家子芝草もしめ　朱
草に花月子我も笑ふ日　蓮
唐風呂の席ともかな御暖子　朱
究て新年と己の物云　蓮
花雪は人こうらしとつるやらん　朱
寛う北密て鳴ミよ川とみ　蓮

覗け弥しさる舟盛りかし、

手枕子喰れ入まの口　米

稲ひれ斗ハ城さゐ浅黄　匡

宗の綱戸の透て涼しさ　米

うけて行雷しも楽色まて　匡

根岸ハ道の乱れてい屋　米

咲ぬ日は風見鳥も節子せれ　匡

隣て手ら承まり大黒　米

杉主ひ差の百里の飛脚米の字　匡

声きてしさし一屑ゑ一もれ　米

落しとまし清めしぬ月の氣　匡

通り白こと差網の蕎麦　米

足翁み連れやう内の長あらひ　匡

胴のね作り主々し年頃　米

唄ひ作て心申ろしさし小備部　匡

今の翁い来つ来り晴し不二の額　米

申さしと戦く迄て花の申れ　匡

こゝら来り行春のさし食　米

明治廿二年　十月廿七日　本年も

熱海に梅の俳諧を廻り会

するかぢに以ゝゝ道この紀左ノ

温泉のきゝめうら嬉しや帰る花　朱邨

すつきり晴て心地よき春　玉和

魚つる舟に浮波のときつ以て　朴

大きれ石の道をとろ　朱

花の外まつ侍いて月に浅し　朴

氣を葉に赤つる地のもとなし　朱

須礼の此し着て流されし　朴

雲の行来は空まかせなれ　朱

世すのたくひかあしの松も五百年　朴

其名をくゝみ侍る旅の底　朱

雲千ゝに梅花の露寄けり　朴

雪庭ひろく雲梅の月　朱

人稀も来つさて碑をみえられ　朴

佳て七花草寄せる哉　朱

鳥もなく其のみつそりと折まつ　朴

一碧鶴は石川のうちし　朱

千々のあそ果の空をも遊度　朴

餘花ひの梅の香の　粘　己未
丁ほそく篁の水もぬるむ也　、
峡陸まで侍送る車力者　杉
今さらに別迄とあれハ泪にも　朱
花疲に疲れ寐るひたひじ　杉
日蓮に絡手の行れ何ひて　牛
家笑も浮る修舎るの甲し　杉
あ招の手にこもりとうちかれ　朱
篠の木以年の子ふみつ拂さゆる　杉
面影の只左道もとゆのうり　朱
けふりと高く嫁給の床　杉
植木の物語も白きと咲あかし　朱
新房の殿の三條とハある　杉
折ともに晴もまれくる小ちすゝ　朱
萱たとも知らでも殿待へ来る　杉
ふと運にあつりしも同し糸遊生　朱
いつやらなれし仙人の術　杉
米年を煮一向も氣に殺　朱
杉

東風に先うしろ吹らせて花の旅　玉水

雨もりしきと知りしあくか　亭外

盃に春君の女に手眠りして　水

丹三の席て汁粉をまゐり　外

月一揆明ても朝の御きげんに　水

裾まくて濡て嫉しうる　西溪　外

秋草の実に涙玉か墓志るし　和

業乃者まてぬ迷ふ近道　外

此雨には似気なき家の通り様　米

賤にはあれと皆か色衣　外

鄙さとてされ手猪口を出さし　水

三年ある汲り目の僧はきよ　外

雑しみころる中まし近十遍　水

清水に老の寐らる　汽　外

菜種子て好ミ丸形ちはれ星水と　水

荷ありて捨て尾花　外

谷間の猪の山路一すりまかり　芙

忘ありほうきに歩むひ水まし　且　外

丁度よく巡る今宵の原外城　、

京の上咲い急がしふまつまい　以　水

常まゝに崩して鑓の気をそへて　朴
いつとはなく本に取進し蛤秋　米
離銭ハ餞に出し夕あらし　朴
名入前きし囲ひもれ秋　米
無常に出れハ木迄も哀れけり　朴
埋火一寸探るゝの幽さに　米
又あまり摘て尽る若菜ふり　朴
絹の名房を違るお嫁　米
庵の奥に乃張月の浮ましく　朴
深入るほどて見まぬ松茸　米

此ごろ隣新を送る折しも哉　朴
門道してもおはし一のふえき　米
酒造家よたくふく鹿の腰つとし　朴
裸に踊ん扇一のこれよ　米
ゆるさと迄何花せぬ荒さかり　朴
たつ孫伸さぬ冬木の末　米
○
傘やされ手へ遠ふ紅葉ぶり　玉斧
初ゆる剣廃子ことの月影　揚睡
秋雨の此ころかし降やそて　蔭水

隣々行し足の近さよ　直可
丘山に庵り殊ゝ旧の旅　朱
さむさをぬけて遊ぶ雛鶴　鈍
神の鳥を籠り社ハ静し　水
宿て寝くも由る浮手流　可
振かしく常居の刀研にやり　朱
流れあさ積り候之まれ無　鈍
秋きのく風に柳を受けて　水
常あれ凡ハ勝あり声る　可
鈍あり田にゝの声の猿しく　朱

都にハ帰ル花のみより見　鈍
春足し四五里斗りハ祝なくて　水
こゝろ便らしく霞もよく　可
きのふ今昔飾る暑の出しめ子　朱
新酒常あし下戸の迷惑　鈍
家舞清のえりはし月を待かねて　水
勝ちの夜ふけれる廻り秋　可
知れるくし猟者の名の細み露　朱
涙めをこゝて思ふ世をまり　鈍
憂中し又の道風をかこそ子　水

袖引し褌針迎る後朝　京
枯芝に霜の名残りの蔵すりと　朱
文字て定まる君なぬ捨公　鮭
雪水の底に稀く魚あり　木
索術府の持て撰より　京
参着る頃ハ卯月の氣て軽く　朱
隔田あたりに雨そゝぎ吟　鮭
ふらりと一人おぼれ亀ふく　水
鵜のそこに捨て試む　京
羅に買ふ小路負市の戻り付　朱

手鑑ありて路の穿鑿　鮭
花みえて葉錢積集の名りて母　水
堤と残つれハ連れ歩ける絵　京
の
出雲りしぐれて行鳥　東京
松葉火に近し縫ふ旅の衣　五朱
不自由さの手を切る食應ふ　揚鮭
一寸ゆるりも春来し山里　蒼水
月代を待て箔を打ほし色　京
地にみえぬ内ハ廓の旅ぶし　朱

時明りさして眼に葉鶏頭　蛙
まだあけぬうち供の小娘　水
直しても名弟子帯のとき解て　斎
迷ましみ后寝ゆくしく　朱
参られもろともに開て風涼し　蛙
檜山志け山麦木豆なる　水
へのつる身を先向ふ姿見の口　斎
鈴鑾麗様何々縦学書　朱
市中の童相撲に親を出て　蛙
佛余りい老の去ましゝ　水

花咲て銭出すよきけ侍より　斎
若鮎ひめる小金井の名と　朱
世宿しきしあれて春す何れ逢てと　蛙
瀘こさへ廓てい居られぬ　水
占ひの中にも易も断てもしに　斎
隣さらはじめてそのそれより　朱
寶蔵の前のえ蓋を掛並へ　蛙
静御前の昔志のいる　水
鍬金者の陰をゆうしも物たまし　斎
まくれ泪にぬらし小衾　朱

梅の香を座もとまれと氣をかめ　蛙
菱川風のうつし絵見ゆる　水
子供衆は心ゆくまて月の歌　舟
木の実叶ふれはなつかしく　来
谷一つ隔つあなたの庵有り　蛙
都は猶さし安楽寺　友　水
髪ゆりを切て今年は後をとり　舟
分家すゝて鋼の進あり　年
花咲は吉んと年よりまき返り　蛙
めきまうし鳴鶯のなき　水

○
高樓に眺るさやかに虹の峯　呉月
ふつと見ゆる晝れ二ヶ月　荷水
川水の底も中より鮎沢て　真舟
又拾ひ之ハ捨る石ころ　来
村雨に布干手早く世話ぞる　揚蛙
垣ハ志ろく卯の花の咲　水
山賤も一声立て叶ひある　舟
深きこそねハ悪しきをしるまけ　年
松譜伊達て徳寄の旨ハ覚　蛙

雑らに隣し　古きこそよき葉　水
老僧ハ咒頭をまもらむに　斎
百ゟ喫の帰り気も　朱
月の秋ハ糸瓜のふくし多くとれ　雄
足まゝれハ鐘の明止　千
寄しく人て以つて帰遣て　斎
小升翁の庵の句ふ探先　朱
住まゐられ庭に花のちらし　雄
野ハ雪あきし　草庵公　水
薪作をよき友としき檮火哉　斎

ふところへ鳥を遊る　朱
有ゑを嗅こと明りと以ふ篇に　雄
魚ゟ網を干並てたり　水
菜ふ穿ぬ水ハ新緑も揉くね　斎
ちらりほらりと子ほふ菜の花　朱
物以ふ居振しの納櫚ゝ　雄
志のふ心の色り顕ハれ　水
揚ゟ際も庵にやまうを見る道　斎
夜中の月の清き粉照り　朱
紅葉もを揉らし集くる廣簿に　雄

案するよりハ新米の出来年　水
清書も稍こ馴し字の旅り　宗
ゑんまより先のまさる三男　米
返信を削る殿をいそぎて　蛙
いと舞れ真の海原　水
汁頃ハ花より僕ふる蕗黄菜や　宗
蝉よりあかし雨雲より入るる　米

物声ハ再のこもりぬ迷ふる　梅嶺
給着でへる朝の立こみら　玉米

葛一ツ墨ぬ住居の清らき　梅宇
濡れ障子ぬ門の小夜のあれ　梅月
豆穀ものまめまちよろしき月　雅柳
招く尾花の露そことまる　岩嶺之
先づこそと縁中見ね途り会　米
丁度折よき法の萩入　宇
幽もするさくいそくにむきり　月
まちのかけそてくい動し　柳
たのしの芋じやかれ業のそえ　岩嶺之
師走のたしきをゆる市人　米

張つめし池の氷を磨く月　子
智識を拝く寓の文机　月
墨染の衣に纏めきりて　柳
青葉の笛の音も遠かる　嶺之
あはれとは借りて嫩木の花やむ　米
ふりそもくれし遠つれの鐘　子
夕ふこの宿の鳥羽に映る影　月
小よきのよさ子体も掛る笠　柳
知る女るり錢の遠ありのり　嶺之
笑ふも色菊御山在娘　米

思ふる主て見さる灰の年　子
病ひと云ふて衣向きあり　月
鏡智をそこ粧ひ上手の居合そ　柳
声きかしに色鏡の鳴つつ　嶺之
浅月子野の泉あつりきんえて　米
秋の夜之し風の身に入　子
米の恋子のまもぬ昔たつはく　月
気に華しい一生の使　柳
ふつにしてもつよ子老も孫任坐　嶺之
池御館の君子乃ふいヽ馬市　米

是て我か地の梓と言ふ遊　于
二人りて明し三ツ割の月
幕串も同し盡る花の下　柳
頬りに啼むし　春の若駒　朱

○

若草ふ名れぬ山あり青み葉　其窓
康印達の遠行今月　玉米
柴の戸のあふる音さへ身に入こ　揚鯉
虎より縫を進ふおとさめる　蓙水
若草く空ふし林伐　挿む　朱

通り入山ふくふ為にこえは　風窓
はらくと降る奥りける夕時雨　水
年一の馬より先はゆりまる　鯉
孫上とそえて先代を掛けしめ　窓
営党よありしとそれ忠ゆく　朱
明れて麗く進せい盡すて　鯉
手戦使の省擬しあり　水
日の入らぬ内に月のさやかしく　窓
秋を領ふ高柳の菜ある　朱
云ふ言そ霜を晴らせむ世を遊り　水

かゝ傘張り糊加減きく　示
間なく花の遊し女子舞扇　兎遊
うらゝ山吹の衣ひろし　年
完来て名残とる水ハ借まれて　水
老子ふ定是非も岩屋　梃
谷あたり炊りて兵も民ハ捨れ　示
村稲云の下天帯り仏へ生　年
人込の中で風の薫り来て　水
籍一生以り気に長足　示
隣ハ眼に何かとそれ婦哭　遊

遠へこちより出し町の名　年
たのまれて洗濯物をあづかり　水
主従の替り長の煩ひと　遊
破れ屋を買れてさし込月の影　示
別られ残る一隊の雁　水
加賀いの田舎角力の集りて　琢
酒の肴ハ讃岐女房哉　年
万福寺の夜ハ不ヶ鳥に集り　水
葬式も無ふ雉の枝　鉄
花の舞ハ年始に来ても善意かり　遊

鴬も好れハ白ふ志つく梅　杉

○

仰山に咲ものや今朝の初氷　楊鈍

物静なる行第き此宿　荷兮

さつはりと庭は追て掃除して　土芳

立出られる使何ぞなし　玉来

海老くさりしも昇月　兮

紅葉に賤の家は眠に　壺　鈍

太秦の祭りに牛も嫁入のり　来

小便もされ哺して行　示

砕けし神の淵きてなまくさく　鈍

忘れぬ事のありて其はつく　兮

酒くらひて以行ふらと届り　示

星いとおふ雨晴の空　来

秋以衆り月の雲みを覚めて　兮

盗し追れハ虫の声し　示

手追ふし狸穴あつ露ね化　来

如ゆ霧深く見申る大寺　兮

咲今日花の盛りて名ふてあし　示

巨燵を空く手剃るの風　来

紫雲にはなれて殊に鳴く　多
光琳風の牛車さらし山　亀通
床の間に軸を自在の言葉かな　扇
ひる過てやら涼しかりけり　朱
青苔丹よこれ由ある槍仙盆　多
くるくる巻て盤も落ちるらし　扇
姑まで通し二人が中にいつしか平　朱
平張延び辻の混雑　多
楼閣の桜に竹田の子守り　扇
はやりを報じれ茶よ　通

伯楽に是にきぬれ菅の月　朱
野は西からの来るぞ　多
采鶴に笙笛華の葉に秋の律　通
むら咲風にくくちぬ楓　扇
見えすれ遠き山の夕ならむ　多
雛の形て雑掛の五六羽　朱
花一枝是に母は此家主屋　扇
長年日和請て時頃　通

百信る童あれども遊内には入られ〻

都といふ名く女蝶の里さへ那　玉芽
まゝ下を与し出来ぬ夕皃　千蛙
水剃捧て軽く私さして　米
子供の使免角漬ぱいる　蛙
此頃の月夜くらく子晴れ　米
納屋に休ミ手餘まり　蛙
花見宛の名らしき款つきす　米
只尻寄て通ひし葬れ　蛙
川越へ新緑得れ向前　米
雪の餘ねるに戸を折　蛙

毎朝は遣ふ梅ある咲様　米
後家でかる嘆ぬ行会　蛙
月影も山本ぬれ迷ふてれ　米
墨の風の途の印名て待　蛙
磯摺纏ぬ祭もとらや醒くり　米
聚て居れは眠るのこの淋　蛙
去としも鐘嘆田手揚る花　米
春の日除り冠る小皁　魁
承茶用れ壬生の踊手具の肴　ゝ
志し一緑折人楊まで俄　米

節分ハ世話して元も武士らしき　嗟
烏の見えけり屋の引る　来
名のみぬ露にも遠寺まで知り　嗟
夏文されハ易のよすきる　来
尼も浅て酒て居る行ぬらし　嗟
すつまり晴て虫の声し　来
破鹿月のよ急く縁かて　嗟
銀して急く梯を味ふ　来
軒寂の芽蘇一つみえまし　嗟
葬を聞けハ犬の何やも　来

吹ことも花ハぬ鐘を近くや　嗟
小嵯峨とのえ露ね陀ハゆき　来
めり風道に鷹の子斑り料紙て　嗟
羽子木不斗並子物らて　来
うつうりと見て居る花の笑くり　嗟
餞もちらし更る名残　来

当季のうち

春いまし箱根両や梅の花　素邦
雪見の客井の下道　玉来

御餞捌一荷のよ成るいそく　荒好
こつゝ斗の貉の笠すき　朴
付るり形らハ苦しぬ夜の月　未
芦手すかりの時あまぬ身ぬ一展　好
八幡市迄ハ待くれぬ古手物　朴
寺会兆り舞の出幾　未
打明て仕舞ハ踊る罪もなし　好
覚へて葉を嗜むの世ありけり　朴
白眉明て暮さへ深くて　未
ちゝやぶれかしとえさる庵　好

月さへ待兼着清くろくろ　朴
暮けりと露の嘩止ハ何　未
條買の座入時と世りあり　好
薬まて喚ふて兼く舟　朴
板葺の表ハ花の角之程　未
ぬるむ竹覚くと幕の内くり　好
読て口の極迄ハ羽をたゝく　ヽ
あろうに散らる馬の鞭進　未
筆の葉子島打揚に僧ふ成　朴
立ち其のとめた御手茶入　好

二十番昔の音とり会　年
おもけよまみ腹ふくれり　朴
咲あまる颯々も衿れ恵心像梅　好
穂々か吹く練の色気まで　糸
別荘は格子造りのきくみやう　朴
銘柄な月のほつるうくぞ　好
草下の二株三本ふしきます　未
花生姜こぼしやうて咲つく　朴
疑さしの本子葉の色のし　好
名えつ屋それ費立の顔　未

水陰の雨て吹らせる議通し　朴
篇をあそつ風の折ふし　好
汁子のふそろく花の福来之　朴
表の池子柳へ画をつく　米

咲み茂子呟それ朝くもり　茂り
傳子吹れは梅草ろ庵　支鳥
居りみれ着りは芸をあふせて　玉水
更つふそれへ揚々されこと　揚鮭
月日数のゆれく宮野のふれ　鳥

二万千月も先四畳まで　閑　多
咄らんハ結句のおり顔ふて　鉞
旅の役者ハ様くにゑへる　米
雛あそびからの悋気の恩たより　多
酒ふくやまふれ顔の桁ふし　京
息まくの虚言ニしも恐極様　米
四種仕舞へハ出し手の仕く　多
山桃代て夜逃の道お合　米
咲れ咲し御房の声　多
志らく行衛青れ柯ゆかぬ　亀遊

流れて清水玉川の里　其
挿稲て下る桜り花の影　其
借して山吹あまやせて　多
先達の貝勇しき頃の聴　米
昔をかたる爲縁の神　多
難いふても老れ者れ果の助あかく　遊
灵見上手の情けたつふり　米
一すし々筆手て免角氣を痛て　二丸
方位れ此度り悪をゝ知る　鉞
咄まするまけ志んて見より　多

十夜念仏一の声さえわたり　遊
鳥谷へ移り老ゆくも自侭に　朱
春の字の裏の色しうるい　蛙
隈もなく照らしやうし月に雪　可
玉ふと斗芋の葉かれ寄　遊
海へとこ木の半部押上て　蛙
紫尖て馬のもりたてられ風　半
きらめの草などうら宗兎みす　遊
南山も枝無ふ寝しなとく　可
弱葉なる清あなるれ花盛　芳

霧の中にみるるのさびつる　蛙
熱海の屋れ銭迎拾ひ　山本
大路は以手うれし金まぐ
魚ゆえみえる路れ深解
二階より又三階は世のまろく
ふつくりと焚して飯をはめのり
手切月に出り合を旅の夫
寒り覚のう定くも届る
来の支の柿の冠さの枝知らん

壱以水呼質哉　柳
書付の色ゟ職悔に涙くみ
下田へきてもはしめ十八
総綿に燃へしら〳〵志らなき
同し海道り米を擣月
影絵の扇子の底うつおかしさよ
見なれぬ芋に秋気しく以る
葉風にへ初て渡る尾花よもき
光ふて蔵る桜しれぬ　道
伊吹山の花て咲らむ咲まつり

梅若丸か家をうつる　蓑史
色紙をと何かし雪しれたるしと
野中の黄りや以呼ま好
念を通て業を学ふの猪向きて
子るの月として風の浮しき
常の花を以ゐてうるいく
八しき丹名し挑し福竹
上へ哥の庵通り有名道の編
家老借の日立・白数
猫も遠い朝をあさと呼て

胴経打ありしを石のききをふ

葉守る井を祭る会なり
盆の月仏も山も顔清く
嵯峨の小萩のあるかしこ哉
うそ寒うやゝ客稀に並へ
比をまけたる襟紛　吾
渋めて茶あまきも馬廿年　青
あ庭何れ遥引荷能る
紅のかみ手織を花と見并
落でありて継ふさきれ

寺乎山書続てよし杖の書　北僊
見ゆる宮えて明ぬ闇を　玉斗
叢に木ろ蔵在の声寂し　僊
鳥太く並へて持れくつく　朱
下道を入通普請の車止　僊
我ながらに喰飯汁　朱
拍子木うつ遠い茶釜を膳にかめ　僊
寄せん馬のとれし嘶し　朱
きめくる子浮気せまひと捨ぶ葉　僊
時なしに思ひよそ樹人見様め　朱

酒醒て古家名の庵に紅　僊

手ことうけて知れぬ二足狼　米

かゝる折捕退きし身の雲　僊

志ろくやら磨のむらし　米

遣水のを運ぶ河原の名残　僊

堀りかね井を探し道に入れ　米

花咲て婆々も持られ小あきなひ　僊

横ちよ道の竹尻をさけし　米

善歸性悪坊主茶やしたて　丶

あし時代とかめるくじし盈　僊

何事も知らする気の毒て　米

噂きくと恋れい嗟しくてまり　僊

物おもひ昔偽名をおかしあ　米

難負の侍つれと厭ふ喜ふ称　僊

安つきし母はいくらぬ買ふ茶　米

むやしとうたる係の役人　僊

貧佛ば浴衣とはしかる松うし　米

郷里はいけい所の難る　僊

町裏を出くに濱辺へつくり　米

船にのりしとき身艇まして居る　僊

新蕎麦を遅めよ子ら進ぶられ　芽
古る床しきに遊べる茎の露　儒
白い寄鷄を露して逃れ去り　年
内職しつつ民家の年かな　儒
いらぬくらし高らし民花の花の陰　年
砧うつ人の頬冠りかな　儒
神代から続く栄枯や縄　玉年
梅の蕊の清らかに日の本　花枝女
網引に暮しあるちる天の浪るて　年

恵みの露ふへまろし気　梅
此秋は旅の身なる身をかな　年
心ゆえまろりと露の音なる　遊
精霊の何ぞおもひもすらしく　茉
年を祝ふれて新の春　梅
簪を木の葉りにのせて　年
好む虫扇の知れる氣かな　梅
石薗の枯葉まりとる盆の上　年
宇内もいよいよ暮るるの春かな　遊
月のもと白露あふれて床り根　禾

以つら嫁がすみのもみ唄　雅遊
糯米取て寄気の急ぐ焼く　剣
小腰のしめてしぼれの行　雅遊
襟元に花の雫の浮めりと　米
写生してとうやら咲に蝶浅く　雅遊
ふり絶て塞て菊きたまるつもり　米
気短以生れ若く君なるし　丶
老以後逝も居るに掛子高名鐶　雅遊
借りて頭巾に伽羅うつり香　米
待つ侘て雪のちらつく嬉しきよ　雅

雨のつい子子三葛買せる　米
松風せぬ吹きに枕の音　遊
流く聞えぬ笛の音　米
照る夜は月おもしろし窓の格子　雅
二尊以前續葉の度　米
雨は少く蓮の蕾門　雅
草木作り花は生にてまつる　米
指まで八年まで出来る萬石　遊
不自由以前て参ん伊豆　剣
孫生まれ後以て遊ぶ膝　雅

産と産ぬ男三人　朱

信あれ眺ぬ止めたり君の花　亀

霞うしうける春の賜ふれ　和

あちさゐの花古きや世の色　毛桂

落は後世の中のしほまし　寿

傳着物を逃くまとませる　柱

一寸先入子このきれあの手　朱

思ひしと思さし見寄時ぞ　柱

沢辺の野に猫のさかるぞ　朱

人眺めハ扨ふ扨るゝ見ん続　桂

節ある笑ふ愛嬌あれ　寿き　朱

蔦こし丹途切てハまっし思ひ路　柱

新茶の香も起しよせ寄る古茶　朱

風も利て寛うりろくと暑の戚　桂

窓越しの明れハ遠くし霞の根　朱

給着て待天狗の日の出　亀

味噌買あり世ゝ　鰯　朱

きらくみちくる小さあるつくしく　遊

川ゆ岡ハ信めのぬ土地　桂

朝の月清迫り出る花の中　迺
汲つく東風に衣紋繕ふ　米
隠家も所々挟引連の以て〳〵と　[illegible]
立緒の哭くいハ福判の出来事　迺
目つまりと玉子子係くる皿の造　米
字しろ盗を志つて見送る　迺
旅君と知つて今さら泣し〳〵　米
時雨の了しめ夕日のまゝ中々く　迺
追網れ書もおほらし蒔付舞　米
掛くの留所光る務男木　迺

絽の袷指鼻迫也極まる　米
休候にも習ふる見らん　迺
目の出岩のおの晴よ〳〵　米
背戸へ折し〳〵灘鑄の来ろ　迺
地色や元々ふうて継着るも　米
別しめ仕事に筬の織〳〵　迺
歴かり譜を神事に奉り〳〵叙　米
産お娘顧て護受免　迺
別し荘の花を残しく咲揃　米
帰ては〳〵あくに愛し四所　迺

芦のかれ沼田の庵や春の月　芳運

南片剃り風のあたゝか　玉和

根分する菊に隣の秋ありて　運

はやて頃から餘さ見けまで　和

橋ら丸常に女内からもつれにて　運

野盛す雪の果の煙　年

冷酒に健氣をみする生海氣ゑ　運

雑身年あらふ裏川岸　年

謡舞にて堂山のうに高ら咲れり　運

ふて経ぬ消る波の間　年

長き夜の萎て一夜の仮枕　運

つれなき人に嗚きぬくの月　和

本屋の古きは白ふ曲り角　運

草臥するは蓮てきえ果て　和

囲碁の友誘ひに来れば集りて　運

古庵の柚子は熟して切る　和

喰ろふる菊り芽筆の晴ゑ雲　運

何ばけの雪持の葉もかくれてぞ　和

朝景気お涼し猫ふかまるの内　和

見飽ぬ顔のあはひもされぬ　一蓮
古き鐙に衣子ま娑あまはひ　朱
公家涼しく住る　薫　一蓮
咲きそこね二度迄をまつ厠へ　口　朱
山手の角のあさうちも外し　一蓮
浪花を聞きは味方の多くあり　朱
こりかそ脈の違ふ女書ぬ　一蓮
一坊向ひて薬の塩の通ふく　朱
小猫のまねてし濡れ女傘持　一蓮
篝火は他へ通り能月夜　朱

暮の迎ひて鐘も落ん　一蓮
菜種刈るわけ白旗ニ三　朱
折し上る眉の手を合ひ　一蓮
住ゐきそ青柳ふとと置合　朱
家の一系高くたしろ蔵浮　一蓮
入口子大きれ迄の二三本　朱
棠も晴れぬ遠み蜜蜂　一蓮

鶉居日記拾葉

積浪吹志て丹後

人乃智乃みしも是年ハ國本寺

錯者

もろ浪の積りゆく船ち深きよ

御防浪兵中

盃ともかさき人越しぬ去への海

州をかけて定石にまゝ海原

生の子しと果なつかしや浪傳へ

銘山十國巻

海よりしたしきけに渡る雲あとの

山と鳥乃羅浪かつぬるもの哉

加知山垣に帽子る砂をかまして
峠を隠しけりと　猫乃素
新走の宿をさいらし
鋸山玉泉館
人と松山泉も添て桃の宿
松露やくおこりや濱の香の　旬
鋸山は園を替ま神社を祭りし起こて
北や嘉しと見える所の旧館亀と湯の
先ゆえ此に大房岬灾を[illegible]
波静にして玉峰岩岸大[illegible]沖
二島の影し映し漁舟の帆たく
よし公堂の水底にくりえし絵[illegible]

佐啟

重ニつくてん
香をし不二と浅乃浦の座
間話松
松の節も汁と起し辞々松の花
話谷ハ帽子にいる塗中
白龍も何しけと言果の桃の花
菜の花乃香し気をつめ浅草
那古観音
妬をうくもさし紅の花の山
再取観音
若紫しそれを山嵯乃来ま遊
誓ら修中乃うわかう内香の宿

熱海渡邊製

国ふるを手静かりしと建保出頭し
彦子伴業然しけ孫あふくもあくりし
境墓を小生遠来松林のうちにかゝり
仁明天皇の頃孝子旋玉のたらん紀
祖の地たりし金を房え絶へん
音の名の今に傳へて風をかよふ
延命寺を星見山再基せし五大
尊の一之水仰の尊像無量寿尊あ
祀らり
係りし其むかし開たりし日本武
波を仁をうる只を汲むうの泉
とゝめ葉遠を鳴らも江

熱海渡辺製

うたをなし梅なるらん峰の鳥く
松岸そら海荒れてたえしく漁家の網風
うたらむ看たるしを如の紀命の人
あらまし いそらしきたえ鳥ひん
花を乃あつとて旅人をあの泡
見津乃宮として會ふらしして一座敷
を置て望挿翠西山の神社の峯を
浅卯に指そて石垣築乃面如之
海浪とうちて化を
うしろ一さゝわ波よ之るら清しまの色
小浦浜生ち
並ぶ西いまそその外乃玉の春

妙ノ浦

日和乃鯛もうかぶやきる春の風

清濤

苔深き老もゆかしき八重桜

嶺岡山牧場

悠々とはるかにもこえ行春の山

金峯より花の峰とうつし其村も遠

荒野山にのり行て大峰辿し

つゞきたる路より遠しつゝ行き

見渡す景はるかにゆくさかり

曽ろとさえ過きし小松の揚雲雀

鬼泪山乃頂上を鋸山峰と云十三峠

熱海渡辺製

一幅の画の如く見ゆる美なる人なる

界を駐せし かく良き景をして眺

けるをおさめし

ゆかしくも[illegible]の上乃なかめ哉

鳴く鶯の音も聞えて日毎の

山も海も[illegible]にて房州は

眼をさへぎる[illegible]一路山を[illegible]

画工も筆を[illegible]

気高し不二山[illegible]海の上

早春[illegible]野々[illegible]

[illegible]

[illegible]九[illegible]

熱海渡辺製

言蔵御世言て不年のむかし近江
のよし　ま十二石田作百も柱田米ちか
アサハら本こと柳係だ付りの里まて
いつれも一粒にあまり拾古代の連歌お
当も知りて稲作くし　此まこの世ら
仏の売りとらもえしるるく候なきう
たし
永田早稲しは思も其の売り哉
本多保格係無を咲を弄ふ客多く
して先の祝しき海邦まて眺望人
まと晴ごぎりの志を立つきりめく
墨田志川堤桜見留弄きりしく

熱海渡邉製

茶話くいふ迄し
田乃見たつ勝よりるきみうら哉
い椋乃香こ語手葉より後出て
陣屋庭中し　高もなし
又こ荒き気も取ての外ええれ
此處中し見所ちらたのしきつきしも
中くにえ知しる思ひきこんに御覧くい一冊と
なしたく高尚のとりれへ可然のらはゞ
喜多利　筆

四十八歳の翁　好古